

# 近世における誕生日

将軍から庶民までそのあり方と意識

鵜澤由美

Birthdays in the Edo Period

UZAWA Yumi

はじめに

- ① 将軍の誕生日
- ② 公家の誕生日
- ③ その他の誕生日
- ④ 誕生日のあり方  
おわりに

## 【論文要旨】

これまで、近代以前の日本には誕生日の習慣はなかったと考えられ、誕生日に関する研究もほとんどされてこなかった。しかし、日本でも天皇や将軍などの誕生日は祝われ、古くは奈良時代に誕生日の行事が行われていたのである。そこで本稿では、近世における誕生日の実態を明らかにするべく、誕生日の祝われ方、位置付けなどを考察していく。

将軍の誕生日には、将軍の御前で祝が行われるとともに、殿中に祇候している者たちに餅や酒が下賜されるという行事が行われた。将軍の誕生日は、将軍と、殿中で祇候する詰衆や旗本、御家人との主従関係を意識させる儀礼の一つであったのである。この祝の構造は大名家の一部でも見られ、藩主の誕生日に家臣が集められて祝儀が行われた。

公家にとつての誕生日は節句のようなものであり、当主が自らの誕生日を最も盛大に祝っていた。家族や友人と祝宴を開くのが一般的であった。産土神である御霊社への参詣も行われた。また、天皇の誕生日は、近世に入っても毎月行われ、女官が心経

を読誦した。

下級武士や庶民は、子供や孫の誕生日を中心に祝った。赤飯を炊き神に上げ、親類や隣人と会食をするなど、家族的な行事だった。

誕生日には餅や酒が出され、また厄除けの力があるという小豆も食べられた。神仏の信仰も重視されている。日頃の無事を喜び、今後もし災であることを願ったと推測される。

年を取るのほみな一斉に正月であつたけれども、前近代の人々も、自分や家族などの生まれた日を特別な日として意識していた。一年に一度めぐってくる誕生日を記念し、祝うという概念があつたのである。

明治以降、西洋文化が輸入され、戦後に満年齢が制度化されて誕生日に加齢の要素が加わり、生活の欧米化も加速していく中で、今日のような祝い方になったと考えられる。

## はじめに

自分や家族、友人などの誕生日を意識したり、祝ったりすることは、私達にとって身近な習慣である。「誕生日」と聞いて思い浮かべるのは、年齢の数だけロウソクを立てたケーキやプレゼントのことであるが、このロウソクの火を吹き消す前にしばしば歌われる歌が英語であることから考えても、西洋的なイメージがある。そのために、誕生日の行事は明治以降欧米文化との接触から、徐々に定着してきたものと考えてしまいがちである。

藤田覚氏は「寛政期の朝廷と幕府」の中で、この時期の公家が、幕府に対して反発心を抱いていたと述べている。その事例として、『輝良公記』の天明六年（一七八六）九月十八日条「今日下官生日可祝処、依関東凶事十ヶ日魚獵令止之弘底及、野菜類市一昨日有之所、是以自武辺咎止了。仍不得止延引、野菜類コソ苦間敷ニ、大勢人集市故為穩便止之歟、武威盛之時世、不可説之至云々」と、同二十四日条「偏以當時之時宜武威偏満于天下、何事も関東節之儀盛可然也云々、如何之事不可然世之風俗云々」が挙げられた。<sup>(1)</sup>一条輝良が「將軍徳川家治の死去による諸事穩便のため、自分の誕生日を祝うことができなかったことに對し、幕府の「武威」が天下を覆い尽くしたけしからぬ世の中であると悲憤慷慨している」というのであるが、この記事を読んで驚くのが、この時代に誕生日を祝う習慣があったことである。

近世中・後期の公家である輝良が誕生日の祝を積極的に行っていたという事実は、誕生日の習慣が欧米からの輸入であるというイメージを覆す。これは輝良だけの特異な例であるのだろうか。武家や庶民は、誕生日を祝っていないのだろうか。このような疑問から、近世における誕生日の実態を追究したいと考えた。

## 誕生日に関するこれまでの研究

近代以前の日本には誕生日の習慣はなかった、という考えは一般的なものなのである。例えば、「日本の習俗では、一般人の間で誕生日を祝うのは満一年の初誕生日に限られていた。初誕生以外に年々の誕生日を祝い、贈答などをする風習は、古くは日本になかった。明治以後一般化しつつある年々の誕生日の祝いはヨーロッパの風習の影響によるものである」<sup>(2)</sup>（『世界大百科事典』）や、「生まれた月日は毎年めぐってくるが、初誕生の祝いを除いて、その日を特別な日として祝う風習は日本の民俗の中にはなかった。それは年齢についての考え方によるもので、（中略）生まれた段階で一歳、あとは正月の年取りを期していつせいに一つずつ年を取っていくという数え年の考え方が一般的であった。したがって、年を取るのは正月であり個々人の誕生日をもって加齢とする観念は稀薄であった」<sup>(3)</sup>（『日本民俗大辞典』）のように説明されている。<sup>(4)</sup>

このように、主に民俗学の分野で、生まれて最初の誕生日すなわち初誕生の研究は行われてきた。<sup>(5)</sup>しかし、誕生日を毎年祝う習慣は近代以前にはなかったという論が通説となっているため、誕生日についての研究は、着手されることすらなく今日まできたのである。<sup>(6)</sup>

歴史学においても、毎年の誕生日は注目されなかった。先行研究はほとんどないと言ってよい。朝尾直弘氏は、織田信長の神格化について述べた際に、「わが国の民俗に誕生日を祝う習慣はないので、恐らくキリスト教の考え方を受容したものと思われる」と記している。<sup>(7)</sup>その後、「禅僧季弘大が足利義政のために毎月二日「公方誕生祈禱」を行っていたことに気づいた」（『蕉軒日録』文明十六年（一四八四）五月二日条ほか）。將軍の事例だけに、さらに検討が必要と思われる」と訂正しているが、近世史における誕生日研究は進んでいない。<sup>(8)</sup>

しかし、一条輝良の例を契機として様々な史料を読んでいくと、天皇、將軍から、庶民に至るまでの幅広い層で、近世を通して誕生日を祝う習慣があったことが確認できる。そこで本稿では、近世における誕生日の実態を明らかにすることを目標に、誕生日の祝われ方、位置付けなどを考察していく。先行研究の乏しい課題だけに、何年も連続して誕生日の習慣が見られる、將軍や公家の例を中心に検討しつつも、多くの事例を用いて論じていきたい。

## 近世以前の誕生日

誕生日の習慣が、明治以降に西洋から輸入されたものでないとするば、日本ではいつから行っていたのであろうか。最も早い例は、宝龜六年(七七五)に見えるという。『続日本紀』宝龜六年九月壬寅条に、「勅、十月十三日、是朕生日、每至此辰、感慶兼集、宜令諸寺僧尼、每年是日転經行道、海内諸国並宜斷屠、内外百官賜酺宴一日、仍名此日為天長節庶使廻斯功德虔奉先慈、以此慶情普被天下」とあり、光仁天皇六十七歳の誕生日を祝って、經典が転読され、殺生を禁断にし、百官に酒宴を賜っている。これが天長節の始まりであるとされている。中国では春秋戰国時代に既に誕生日・誕生日を祝うという考え方があり、玄宗皇帝の誕生日の際に天長節と称された。<sup>(9)</sup> 光仁天皇の誕生日祝はこの二十七年後のことであるから、唐の影響を受けたものであろう。

天長節は、宝龜十年に二度目が行われた後、明治時代まで途絶える。<sup>(10)</sup> しかし、天皇の誕生日を天皇家において内々に祝う慣例を、いくつか史料で見ることができる。時代は下がるが、『お湯殿の上の日記』<sup>(12)</sup> 大永六年(一五二六)十二月廿三日条に

御たんしやう日の御おゆわゐ(祝)あり。めでたくく。御むろの御所より御なて物。あいせんの御ほんそん申いたさるゝ。大せう院より三色五かまいる。御たんしやう日のめてたさに准后より二色。

御たるまいる。(一) 内筆者)

とある。この日は後奈良天皇の正誕生日(生まれた月日と同じ日)であるが、毎月の誕生日も祝っており、宮中では誕生日の行事は身近なものだったようである。(なお、本文中で「誕生日」とは特に断らない限り、生まれた月日と同じ日を指すものとする。)

武家に目を移すと、『武家名目抄第五(歳時部)』<sup>(13)</sup>「御誕生日」の項に、鎌倉年中行事云御誕生日ハ五山十刹以下ノ寺々ヨリ御祈祷疏之銘維那持参アリ。御名乗被遊有御出ノ後寺々維那ニ御対面。御誕生日ハ毎月大御所へ有御出御台御酒数献参。殊更正御誕生日ハ終日御酒アル也。

とあり、寺に祈祷してもらい、杯事を行っている。ここでも誕生日は月々の行事であったことが分かる。また、室町將軍の誕生日の様子は『蕉軒日録』、『大日本史料』などで確認でき、『大日本史料』応永二十年(二四一三)三月十二日に「義持、諸寺ヲシテ、其誕生日祈祷ヲ行ハシム」という記事が見える。<sup>(14)</sup> 誕生日とは祈祷をする日であったようだ。足利義持は二月十二日生まれであることから、やはり毎月行われていたといえよう。

最後に、織田信長の例を見ておきたい。信長は自身の神格化を図って寺院を建立し、自らを神体として、その誕生日には人々に参拝を強制したという。<sup>(15)</sup> これについて、朝尾直弘氏は、信長が、誕生日を聖日とするというキリスト教的な考え方をとり入れていると述べている。<sup>(16)</sup> また、ユルン・ラメルス氏は、信長の誕生日(の日付)について述べた文章で、その記録が宣教師ルイス・フロイスによるものであるため、「(耶蘇会の史料の弱点の第三は)中世の日本では誕生日を祝う習慣がほとんどなかったことである。誕生日より、命日の方が大事にされた。日本では誕生日を祝う習慣は明治以降に始まった。それゆえ、信長が当時本当に誕生日祝を行ったかどうかは疑わしい。むしろ、宣教師であるフロイスが、

ヨーロッパの感覚で誕生日の祝いと推量したとみるべきではないか」と論じている。<sup>(17)</sup>

しかし、これまで見てきたように、信長以前も誕生日の習慣は日本に存在している。公武に接近していた信長が影響を受けた可能性は十分にある。また、フロイスによれば信長は、「毎月予が誕生の日を聖日と」(傍線筆者)するように命じている。<sup>(18)</sup> 誕生日行事を毎月行う習慣はキリスト教圏にはなく、むしろこの時代の日本に特徴的な考え方である。従って、信長が誕生日を記念した行事を行っていたことは事実であり、それが宣教師などがもたらした西洋の風習によるものではなく、天皇や将軍と同じような感覚によってなされていたと考えられるのではないだろうか。

古代・中世のものはごく一部の例しか見ていないが、このように、日本には近代以前から誕生日の習慣があったのである。ここからは、本稿の課題である近世における誕生日について、検討を加えていきたい。

## ① 将軍の誕生日

### 第一節 歴代の誕生日

関白一条輝良が嘆くほどに権勢を振るった江戸幕府であるが、その頂点に立つ将軍の誕生日はどのようなものであったのだろうか。まずは、歴代将軍の誕生日について見ていこう。(表1参照)

家康の誕生日は十二月二十六日であるが、『鹿苑日録』<sup>(19)</sup>の慶長八年(一六〇三)同日条に「將軍正誕生御祈禱」とあり、祈禱が行われている。秀忠の誕生日も、『本光国師日記』<sup>(20)</sup>慶長十七年四月七日付の書状に「只今者 將軍様御誕生日之御祈禱二方丈へ罷出候。急候間、書中不具候」と書かれていたことなどから、やはり祈禱が行われていたことが分

かる。<sup>(21)</sup> しかし、『徳川実紀』、『続徳川実紀』など、幕府の史料には、家康、秀忠の誕生日に関することは記されていない。

殿中で誕生日の行事が行われるのは、管見の限り、家光期になってからである。寛永十四年(一六三七)七月十七日、家光満三十三歳の誕生日が祝われたことが記録されている。『江戸幕府日記』には「一、公方様御誕生日ニ付而於 御座間御酒并御餅献之<sup>(22)</sup> 荒川権左(重忠) 役之。殿中祇候之面々ニモ御酒被下之」(一)内筆者。以下同じ」と、<sup>(23)</sup> 『大猷院殿御実紀』には「この日御誕辰にて御宴あり。奥にて猿楽御覧ぜられ、其徒に時服纏頭せらる。けふ當中伺候のともがら酒を賜はる」とある。<sup>(24)</sup> 荒川権左という人物は不明だが、岡田淡路守は御膳番である。<sup>(25)</sup> 将軍の居室である御座間では御膳番が家光に餅を献上する役を務め、その日殿中に伺候していた者たちが酒を賜ったという。翌寛永十五年には、酒だけではなく餅も下賜されるようになる。<sup>(26)</sup>

家綱以降の将軍は、在職中その誕生日が必ず祝われたと言ってよい。明暦元年(一六五五)八月三日、家綱の誕生日の『厳有院殿御実紀』には「御誕辰にて御酒たまはる事例のごとし」と記され、餅と酒を賜わることが定着してきたことが分かる。そして、家綱期の後半から綱吉期には『徳川実紀』の記録に「御誕辰の御祝例に同じ。」という記述がほとんどになり、恒例行事とみなされている。<sup>(26)</sup>

家宣についても同じように祝われるが、家継の誕生日には特徴がある。正徳四年(一七一四)七月三日の『有章院殿御実紀』の記事を見てみよう。「御誕辰なれば、群臣にもちる、のし鮑をたまふ。根津権現に鮮鯛一折、昆布一折、行器一荷、樽一荷、初穂五百疋、同じ稲荷にも同じくす、めらる」と、鯛などを根津神社に奉納をしている。根津神社は家宣の産土神であり、家継誕生の際にも宮参りを行った。こうしたことから、誕生日にも例年奉納を行ったのだろう。

紀州藩主から将軍の座に就いた吉宗の誕生日も毎年祝われ、続く家重

表1 将軍誕生日表(『徳川実紀』『続徳川実紀』『柳営日次記』『府内藩記録』より作成)

[illegible]

表 1 將軍誕生日表（『徳川実紀』『続徳川実紀』『柳営日記』『府内藩記録』より作成）

1719	4						餅酒							
1720	5						餅酒							
1721	6						餅酒							
1722	7						餅酒							
1723	8						餅酒							
1724	9						餅酒	餅酒						
1725	10						餅酒							
1726	11						餅酒							
1727	12						餅酒							
1728	13						餅酒							
1729	14						餅酒							
1730	15						餅酒							
1731	16						餅酒							
1732	17						餅酒							
1733	18						10.25 餅酒							
1734	19						餅酒							
1735	20						餅酒							
1736	元文 1						餅酒		家治 5.22					
1737	2						餅酒		誕生					
1738	3						餅酒		餅 献					
1739	4						餅酒							
1740	5						餅酒							
1741	寛保 1						餅酒							
1742	2						餅酒							
1743	3						餅酒							
1744	延享 1						餅酒							
1745	2						9.1 隠居	餅酒						
1746	3						餅酒	餅酒						
1747	4						餅酒	餅酒	餅酒					
1748	寛延 1							餅酒						
1749	2							餅酒						
1750	3							餅酒						
1751	宝暦 1						6.20 没	餅酒						
1752	2							餅酒						
1753	3							餅酒						
1754	4							餅酒						
1755	5							餅酒						
1756	6							餅酒	餅酒					
1757	7							餅酒						
1758	8							餅酒	賀延					
1759	9							餅 献						
1760	10							4.1 隠居	献					
1761	11							6.12 没	餅酒 献					
1762	12								餅酒					
1763	13								餅酒					
1764	明和 1								餅酒					
1765	2								餅酒					
1766	3								餅酒					
1767	4								餅酒					
1768	5								餅酒					
1769	6								餅酒					
1770	7								餅酒					
1771	8								5.21 餅酒					
1772	安永 1								餅酒	家斉 10.5				
1773	2								5.21 餅酒	誕生				
1774	3								餅酒					
1775	4								餅酒					
1776	5								餅酒					
1777	6								餅酒					
1778	7								餅酒					
1779	8								餅酒					
1780	9								餅酒					
1781	天明 1								餅酒					
1782	2								餅酒					
1783	3								餅酒					
1784	4								餅酒					
1785	5								餅酒					
1786	6								餅酒					
1787	7									餅酒 散				
1788	8									餅酒				
1789	寛政 1									宴 餅酒				
1790	2									(家斉女法会)				
1791	3									餅酒 鼓吹				
1792	4									餅酒 献 (若君にも)	家康 5.14			
1793	5									餅酒	5.14 誕生			
1794	6									餅酒	5.16 餅酒 申			
1795	7									餅酒	5.15 餅酒			
1796	8									餅酒 散				
1797	9									餅酒 (中)				
1798	10									餅酒 申				
1799	11									餅酒 (中)				
1800	12									餅酒 (散)				
1801	享和 1									餅酒 (中)				

表1 將軍誕生日表(『徳川実紀』『続徳川実紀』『柳営日次記』『府内藩記録』より作成)

[illegible]

猿、申、散…能楽  
献…献上があった  
？…当該日の記事なし  
太枠内は在職中

期も大きな変化はない。<sup>(27)</sup>

十代將軍の家治の誕生日には、老中で、家治誕生時の暮目役を務めた酒井忠恭が、何度か献上をしている。『浚明院殿御実紀』宝暦十一年五月廿二日条に「御誕辰によりて、出仕の群臣に餅酒を賜ふ。酒井雅楽頭忠恭は御着進らせて御誕辰を賀す」とあるが、將軍の誕生日に献上が行われるのは珍しい。<sup>(28)</sup>

『徳川実紀』の家斉期以降の史料は編纂途中であったために、記述が細かく残ったまま、『統徳川実紀』<sup>(29)</sup>として刊行されている。例として、家斉と家定の誕生日の史料を挙げると、

寛政十年（一七九八）十月五日（家斉）「御誕辰の御祝として、高家、詰衆、奏者番、布衣以上、その他上直のともがら席々にして祝餅酒を賜ふ。奥にして申樂あり。宿老はじめ見ることを允さる。能組は大社、頼政、草紙洗、景清、巻絹、春日龍神、狂言宝の槌、引き、口まね、因幡堂なり」

安政三年（一八五六）四月十五日（家定）「一、御誕生日二付、為御祝儀老中始、高家、詰衆、御奏者番、御留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上之御役人并 御目見以上、当番、詰番、有合之面々江於席々御祝之御餅、御酒被下之。一、於奥御能有之。老中、若年寄中見物被 仰付之」

このように、餅、酒を下される範囲が、老中、高家、奏者番、留守居、布衣以上などと、明確に書かれている。また、能楽が行われることが恒例となっている。能楽は殿中でしばしば行われており、誕生日にその記述があっても関連して行っているものであるか否か判断が難しい。だが、能楽師が記した『梅若実日記』<sup>(30)</sup>安政二年四月十五日条に「御本丸中奥御誕生日御祝義御能久々ニ而有之」（「久々ニ」とあり、『梅若実日記』にも『統徳川実紀』にも、安政元年には能楽を催したという記事がない。）とあるように、誕生日を祝して能が行われたことが分かる。家斉

以降下賜の対象が詳細に書かれているのは、『徳川実紀』の編纂上の問題であろう。能楽については、史料に現れないだけで、家斉以前にも誕生日に毎年催されていたのかもしれないが、少なくともこの時期からは恒例化していたようである。

家茂の誕生日祝に関して『昭徳院殿御実紀』には、万延元年（一八六〇）と文久二年（一八六二）しか記述がない。しかし、『柳営日次記』<sup>(31)</sup>に安政六年、「府内藩記録」<sup>(32)</sup>に文久元年と慶応二年（一八六六）の記録が残っているので、江戸幕府が倒れるまで將軍の誕生日は祝い続けられたと言えよう。

慶喜の在職中ただ一度の誕生日も、祝われていた。『慶喜公御実紀』慶応三年十月二日条に「一、御誕生日二付、老中、若年寄中、服紗小袖、麻上下着用。例刻（マ）登城。此方仲ヶ間、同服同刻登城。但為恐悦御用部屋江罷出候事」とある。ただ、慶喜が京都にいたので、これまでの將軍の誕生日と異なり、餅や酒が下されることが記されている。<sup>(33)</sup>同一史料を用いていないので確かとは言えないが、家茂の誕生日祝においても、家茂不在時は下され物がない。偶然だろうか。<sup>(34)</sup>

祝儀の詳しい内容は後に述べるが、老中、高家、奏者番、詰衆、布衣以上などに餅、酒を振舞うことが慣例化していた。従って、將軍が変わる度に誕生日も変わるが、誕生日の祝儀は年中行事の一つであると言えるであろう。また、大名や幕臣に餅などを下賜していることから、將軍の誕生日は嘉祥や八朔のような儀礼的な意味を持つ日であったと考えられる。誕生日を祝う習慣は確かに存在し、これまで考えられていた以上に政治的にも重要な位置を占めていたのである。

毎年祝われた誕生日だが、稀に延期されることもあった。吉宗の享保十八年（一七三三）十月三日に嗣子家重の正室が死去し、誕生日である同二十一日がその法会であったため、祝儀が同二十五日に延期された。<sup>(35)</sup>家慶期には三度の延期があった。天保九年（一八三八）と十一年に息子



と娘が死去し、それぞれひと月以上の間を置いて祝っている。<sup>(36)</sup>弘化元年（一八四四）五月十日には江戸城本丸が炎上する。家慶の誕生日は五月十五日であったが、四十日以上も経った六月二十七日に例年通りの祝が行われた。將軍の誕生日行事が中止されることはほとんどなかった。<sup>(37)</sup>

將軍によつては、前將軍の忌日などにより誕生日そのものが変更されることがあった。例えば、綱吉は一月八日の生まれであったが、前代家綱の忌日が五月八日であることから誕生日祝は毎年一月九日に行われることになった。<sup>(38)</sup>家継の誕生日は、將軍在職中に七月三日から四日に変更された。<sup>(39)</sup>また、家定は四月八日に生まれたが、『徳川諸家系譜』に「（四月）十五日、於西丸若君様御誕生日御祝。於奥有御能<sup>從此改</sup>」<sup>(40)</sup>とあるように、理由は分らないが、生まれた日が変わっている。珍しい例としては、家茂は閏五月廿四日生まれだが、誕生日の祝儀は正五月二十五日に行われた。<sup>(41)</sup>日付も一日変えられたのは、家茂が家定の後継者となった日が六月廿五日であることと、関係があるのだろうか。『万覚書』<sup>(42)</sup>という史料には、吉宗以降の將軍の子女の誕生日が詳細に記されているが、家茂の項には、家定の養子になった日が書かれている。

最後に、何故寛永十四年に、殿中での誕生日の行事が史料に現れるのかということについて述べたい。この年の正月、家光は病を得る。発端は虫気によるものであったが長引き、三月と六月には小康を保ったものの、七月に再発した。この時の家光の症状は、無氣力、不食、不眠などの鬱状態であったようである。七月十日以降、医師を替えたことにより病状は好転したが、なお治まらない不眠の解消のために、家光は日々、能や踊り、囲碁、将棋を見て過ごしたという。そして、同じ目的で、御三家、老中、六人衆などが茶や膳を献じ、能や風流を催した。<sup>(43)</sup>殿中で誕生日行事が行われたのは、まさにこのような時であった。

また、二木謙一氏によれば、江戸幕府の年中行事は、幕府の諸制度や組織の形成・確立とはほぼ平行して儀礼化されているという。<sup>(44)</sup>正月参賀

や、嘉祥、八朔、玄猪といった行事は、家光の寛永期に儀礼として確立したのである。従つて、年中行事の一つである將軍の誕生日祝儀も、この時期に儀礼化して現れるようになったのであろう。家康、秀忠の時には寺院に祈祷を頼み、祝ったとしてもごく内々だけであったであろう誕生日の行事が、この時期に、殿中に祇候する者にも関係する行事に高められたと考えられる。年中行事の儀礼化が進む時と、家光のために何か晴らしになるような催しが必要とされていた時がちょうど一致した結果の産物が、將軍の誕生日祝儀だったとは言えないだろうか。家光の気晴らしのためという考えが推測の域を出ないにしても、家光期には小異のあった誕生日の祝儀の様子が家綱以降定型化してくるので、この時期に整えられてきた行事であることは確かであろう。

## 第二節 將軍の家族の誕生日

約二百三十年の間、ほぼ絶えることなく將軍の誕生日は祝われ続けてきたが、將軍の子息など家族の誕生日はどのように扱われていたのだろうか。結論から言うと、將軍の嗣子、庶子（一例）、次期將軍の嗣子（將軍の孫）、大御所、將軍の生母（一例）の誕生日は祝われていた。順に見ていこう。

家綱は、生まれながらに將軍の長男であり、いわゆる初誕生から嗣子時代、將軍在職中を通して毎年欠かさずその誕生日が祝われた唯一の將軍である。『江戸幕府日記』慶安二年（一六四九）八月三日の記事を見ると、「大納言殿御誕辰なるにより、老臣は其御方にめして餅、酒をたまふ。拍子三番あり。また近習へも餅、酒給はり、當中直日の輩へも餅、酒給ふ」と、老臣を召し寄せて餅、酒を給い、また近習や当番の者にも賜い、能楽を催しており、將軍である家光とあまり変わらない祝い方をしていることが分かる。

家宣は甲府藩主の子として生まれたが、宝永元年（一七〇四）十二

月に綱吉の養子となって西丸へ入る。そして、綱吉死去の前年宝永五年に、誕生日の祝儀が行われているのが見える。「大納言様御誕生日ニ付於西丸御祝如例 御座之間 大沢出雲守(基躬 高家)」。〔御祝如例〕とあるのは、それまでに西丸で行われた誕生日祝儀と同じであるという意味にも取れるが、家宣の西丸入り以来例年祝っていたとも考えられる。

家継は、生まれた時には兄がいたが、後に嗣子となった。初誕生だけ記録がある。『文昭院殿御実紀』宝永七年七月三日条に「鍋松君(家継)御誕辰にて御生母左京局へ銀三百枚、縮緬二百巻、綿三百把、檜重、干鯛を給ふ」とあるように、祝の催しについては触れられていないが、生母に祝の品が贈られている。

家重は、満五歳の年に父吉宗が将軍になった。享保九年(一七二四)にのみ記録があり、二丸で餅と酒が下賜されている。<sup>(46)</sup>

家治は、家重待望の長子であるとともに、吉宗の孫でもあった。吉宗在職時に初誕生を、家重在職時に誕生日を三回祝った記録が残っている。中でも初誕生の祝儀は盛大で、吉宗から家治に紗綾と二種一荷が、家重からは縮緬と二種一荷が贈られた。吉宗は家重にも肴を贈り、また家治側からも吉宗に二種一荷が贈られている。この時の使を務めたのは吉宗・家重付きの者たちで、それぞれ褒美を得ている。<sup>(47)</sup>『有徳院殿御実紀』には「明年よりは 大納言殿御誕辰のごとく御祝あるべしと仰出さる」<sup>(48)</sup>とあることから、記録には現れない場合でも家治、そして家重の誕生日も毎年祝っていたことが推測できる。

家基は家治の長男で若君様と称されており、誕生日の記録も宝暦十三年(一七六三)(初誕生)から明和六年(一七六九)、安永六年(一七七七)と数多く残っている。<sup>(49)</sup>このように嗣子として育てられた家基だが、安永八年に没してしまう。天明元年(一七八一)から家治の養子となった家斉の誕生日祝は、将軍になるまで見えない。

家慶の嗣子時代には初誕生を含めて三回、祝儀の様子が見えている。家治の時と同じように、初誕生の際には将軍との間で贈物のやりとりがあった。<sup>(50)</sup>

家定は、将軍家斉の孫として生まれた。天保二年(一八三一)には、家斉、家慶、家定と親・子・孫全員の誕生日祝儀の史料があるが、それぞれほとんど変わらない祝い方である。<sup>(51)</sup>また、家斉が隠居した天保八年から五年連続で『慎徳院殿御実紀』に家定の誕生日祝が記されている。<sup>(52)</sup>

将軍の庶子で誕生日についての記録が残っているのは、家光の三男亀松のみである。正保三年二月廿九日、「亀松君誕辰にて老臣祝膳をたまふ」と誕生日を祝った。<sup>(53)</sup>しかし、翌年には満二歳で没する。初誕生だけが祝われたようである。

以上のことから、生まれながらもそうでない場合でも、将軍の嗣子また次期将軍の嗣子といった、将来将軍職を継承することが決定づけられた者は、殿中で誕生日を祝う対象となっていたことが分かる。嗣子として生まれた子の初誕生は特に盛大で、本人の誕生日を祝うだけでなく将軍の喜びを祝う日でもあったのではないだろうか。庶子の誕生日も、ごく身近にいる者だけで簡単に祝っていたということは考えられる。亀松の例はその中でも規模が大きかったであろう。しかし、近習のみならず殿中に伺候する布衣以上の臣下に餅や酒を下賜するという祝のあり方は、嗣子だけに見られるものである。それは将軍の誕生日祝に非常に似ており、将軍後継者のものとして行われる、儀礼的な面を持っていたと言える。

一方、将軍を退いた大御所の誕生日も祝われていた。吉宗(延享三、四年(一七四六、四七))と家斉(天保九年)の三例である。西丸で餅、酒を下賜している。<sup>(54)</sup>いずれの場合も死去の数年前に祝うのを止めているように見えるが、史料に現れないだけであるのか、権力が現将軍に完全に移行したことを示しているのかは分からない。

最後に、網吉の生母桂昌院の誕生日を見ておこう。『隆光僧正日記』<sup>(56)</sup>  
元禄十一年（一六九八）正月十三日条に

今日者、三之丸様（桂昌院）御誕生日ニ而、毎年為御祝儀公方様被  
為成、愚も虚空藏法御札并二つと・よめな・つくし三種壺籠献上  
之、御料理過御仕廻被遊、公方様分段子三卷被下之、三之丸様分真  
綿三十把・羽二重五疋被下之。

とある。いつから始まったかは定かではないが、「毎年」とあることか  
ら数年来続いている行事であることは間違いない。護持院隆光は元禄八  
年（1695）から宝永元年（1703）まで毎年三丸で行われる祝宴に参席し、網吉と桂昌院の  
両方から祝の品をもらっている。そして自身も、御札や山菜を献上して  
いる。桂昌院の誕生日では餅や酒の下賜はなく、招かれる人物も隆光の  
他には護国寺の僧や網吉の側用人夫妻である。網吉自ら仕舞を披露する  
など内々の雰囲気濃い。だが、このように將軍生母の誕生日を祝った  
史料は他には見当たらず、網吉に特徴的な事例であると言つてよいだろ  
う。

### 第三節 行事の内容

第一節、二節で見てきたように、將軍やその嗣子の誕生日祝いは、殿  
中で毎年行われていた。この日に、老中以下布衣以上、また諸物頭など  
に餅や酒が下賜されていたことを述べたが、本節では具体的にどのよう  
な儀式が行われていたのかを検討していきたい。

將軍の誕生日には、將軍自身が身邊の人と祝う行事と、老中らに餅、  
酒が下賜される行事の、二つが行われていたと考えられる。寛永十四年  
（一六三七）の家光の誕生日を例にとると、御座之間で御膳番が家光に  
餅を献上し、祝宴が開かれた。また、能が催され、役を務めた者に時服  
が被けられている。これとは別に、表において老臣以下「営中伺候のと  
もがら」に、酒を下されたのである。この場には將軍家光は顔を出して

いないと思われる。「御目見」や、「出御」の語が確認できないからであ  
る。<sup>(57)</sup>

この二つの行事のうち、御座之間で行った誕生日祝いの様子は、史料  
でほとんど見ることができない。家光期に「御誕辰にて営中伺候の輩  
御酒給ひ、酒井讃岐守忠勝（大老）、堀田加賀守正盛（六人衆）、松平伊  
豆守信綱（六人衆）、阿部豊後守忠秋（六人衆）、阿部対馬守重次（六人  
衆）は御前に召て給ふ」<sup>(58)</sup>、「一、今日 公方様 御降誕日於御座之間御祝  
之餅<sup>御三方二載之。昆布小豆加之。</sup>献」<sup>(59)</sup>とあるくらいである。これらの記事から推測すると、  
將軍は誕生日に御座之間で餅を献ぜられ、祝宴を開き、ごく親しい人を  
招いてその場で餅や酒を与えていたようだ。

これに対して、殿中に伺候している者たちに、餅などを給わる行事に  
関しての史料は比較的豊富にある。中でも、この行事の際に、どのよう  
なことが行われたかを知ることができるのが、武家の典礼を司った奏者  
番の、「手留」と呼ばれる史料である。これは、奏者番が儀礼を執行す  
るに当たつてのマニュアルのようなもので、儀礼ごとに手順や位置取り  
などが図入りで記されている蛇腹折りの小さな本である。奏者番の日記  
をもとにして作られたという。先輩奏者番から借りるなどして写し、保  
管していたので奏者番を務めた大名家には大量に残されていた。<sup>(60)</sup>時代が  
大幅に下がつてしまふが、今回は、京都大学総合博物館が所蔵する、大  
分府内藩松平家の『府内藩記録』を参考にする。以下に挙げるのは、文  
政四年（一八二二）の家斉の誕生日の記事である。引用が長くなるが、  
手留は興味深い史料であるにも拘らず翻刻はほとんどなされていないの  
で、全文を載せておく。<sup>(61)</sup>

十月五日

当番 松平丹波守（光年）

西丸当番 永井肥前守（尚佐）

一、例年之通今日御誕生御祝儀有之、御用番備中守殿（阿部正精 老中）

例刻登 城之旨昨日当番長門殿（丹羽氏昭）廻状ニ申来。自分（松平光年）当番ニ付五半時<sup>時分</sup>着出宅登 城部屋江罷出。

一、右大將様（家慶）從西御縁 御入奥有之旨、須田与左（衛門盛昭目付）<sup>分</sup>以降益為心得罷申越候。

一、罷出候同役衆河内殿（増山正寧）、右近殿（松平武厚）、長門殿、周防殿（松平康任）、沔岐殿（松平定則）、主水殿（高木正則）、伯耆殿（松平宗発）、左近殿（水野忠邦）

豊前殿（本多正意）風氣、隠岐殿（西尾忠善）頭痛氣ニ付不参断手紙被差越二階江差出置。

一、御太鼓四打老衆登 城ニ付、当番自分始同役不残中之間江罷出、揃後自分ハ芙蓉之間江罷越、非番同役衆ハ御目付衆為寄被申聞、其存知呉候様自分江被頼部屋江被引候。

一、御目付神尾市左（衛門元孝）被相越席江寄候様被申聞候之間、承知之旨答、且後刻御表宜敷旨尚又被申聞候歟、同人江相尋候處、其心得之旨被申聞候。

一、市左為寄被申聞候趣以永膳部屋江申遣同役衆追々被出候。

一、席々追々寄り候様子ニ付何レ茂申談芙蓉之間へ細廊下之方上ニ御右筆部屋御張付際江当番自分始高順ニ如末図並居候。

但当番自分始九人ニ而、上之方不打曲先格之通不及候。上之方

江打曲り候後其御用番江以御同物頭御届申達候事。下之方江ハ打曲り候とも御届ニ不及候事。

一、高家衆、詰衆、布衣以上之御役人、雁之間、菊之間、芙蓉之間如末図夫々被直居候。

一、不残座着揃候而、御目付市左被参表宜敷被申上候段被申聞候。

一、無程老衆細廊下より被出、芙蓉之間御張付を後口ニ<sup>御杉戸</sup>之方を上ニ御列座。御祝義之餅<sup>御給仕進物番</sup>持出老衆始順々頂戴之面々之前江置之。其節足打江手を添戴キ置之。

但御餅銘々之前江持参を見懸、扇子取置之候。

白御餅 七小豆添

御熨斗鮑

御土器

右頂戴之面々不残出揃候分御銚子出、老衆江一献盛引。夫分順々頂戴、自分伯耆殿江及会釈頂戴。右之内老衆江者又御銚子出一献盛引一同一献過而、又老衆江御銚子出一献盛引、一同江御銚子出一献盛、御加有之而御銚子入。其節用意之袋懷中より出し、御餅、熨斗、小豆敷紙とも入之後口ニ差置候。

但御土器者其俣足打ニ載置。

一、足打引候時手を添、不残引終候分大目付衆会釈ニ而御留守居始雁之間、芙蓉間、同御縁類ニ着座之衆一同菊之間御縁類江被拔候。夫分高家衆詰衆一同御礼右相済被引候を見斗、自分始同役<sup>初九人</sup>同役<sup>跡四人</sup>ニ側ニ如末図罷出其外諸役人も一同跡江被出候。当番自分分御祝頂戴難有旨申上、復座。

但御礼罷出候節、頂戴之御餅并扇子者其俣元席江置之。右相済

老衆被引候付、自分跡ニ付中之間迄相越、部屋江相引候。

一、被出候同役衆追々被致退出候。

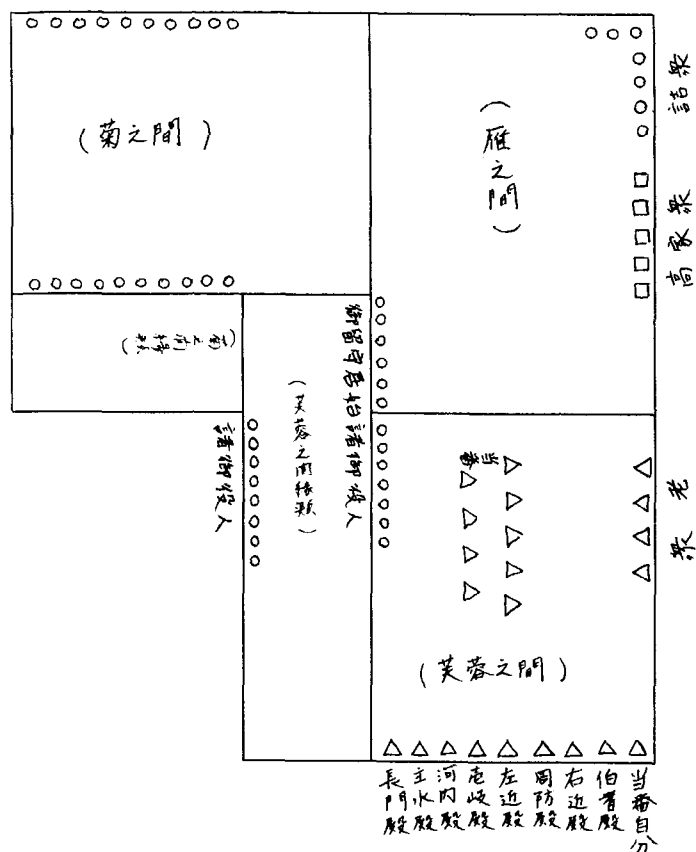
一、日記認、廻状下組致一読候。

一、奥御能有之候ニ付、御台所替席医師溜ニ相成居候事。

一、九半時前御断之旨坊主衆申聞中之間まで罷越候處、備中守殿御断之旨丹河様申聞、如例進物番江及会釈部屋江引左近殿同道退出、帰宅八時。

芙蓉之間御祝儀頂戴并御礼申上候図（傍線は奏者番）（図1参照）  
誕生日の祝儀は午前中に行われたようで、当番の奏者番は朝から登城して準備に当たっている。当時二十人の奏者番が在職していたが、この誕生日儀礼は九人の奏者番が担当した。使用された部屋は、雁之間、芙

芙蓉之間御祝儀頂戴并御礼申上候図



( ) 内部屋名筆者

図1 『府内藩記録』文政四年十月五日〈筆者による転写〉

その後ろに並ぶという。別の手留<sup>(62)</sup>によると、町奉行、勘定奉行、普請奉行、遠国奉行などがその面々である。礼が済むとそれぞれの詰部屋へ退き、誕生日祝儀は終了である。奏者番は記録を認め、午後には帰宅している。なお、この年は嗣子家慶が奥に入ったことが記されている。家斉の御前で内々の祝儀が行われたのであろう。奥では能楽も催された。

このようにして餅、酒を頂くことのできる者たちは、『徳川実紀』には「當中伺候の輩」や「群臣」とだけ書かれ、『続徳川実紀』には「高家、詰衆、奏者番、留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上の諸職人」などと記されていたが、実際にはどのような人々が祝儀に関わっていたのだろうか。餅や酒をもらう側の日記などから、追究してみたい。

まず、寺社奉行時代の大岡忠相（延宝五年（一六七七）〜宝暦元年（一七五一））の日記『大岡越前守忠相日記』<sup>(64)</sup>を見ると、延享元年（一七四四）十月廿一日（吉宗誕生日）条に、

一、部屋二而熨斗目麻上下着替申候、前々者本願寺輪番江奉書御渡し拝領物納、今日御誕生之御祝儀頂戴之義大目付令伺之上、熨斗目麻上下着替御祝儀頂戴之事二而候之処、三四年以前令御用二而罷出候事二付、向後窺二不及御祝儀頂戴之筈二成、今日も右之通也。

……（国持四品以上重陽御内書など拝領）……

一、右済御祝儀頂戴之席雁之間江参席図左之通

（図2参照）

右之通罷在御誕生御祝儀之御餅御酒頂戴仕候、右済詰衆次江付御祝儀申上候。

一、右済退出九半時前帰宅。

とあるように、雁之間で餅と酒を頂戴し、詰衆の次という順番で老中に

蓉之間、菊之間である。奏者番と目付が協力して進行している。そして高家以下の出席者が着席し、最後に老中衆が入室して祝儀が始まる。進物番の給仕によって、小豆を添えた白餅と熨斗鮑と土器を載せた足打がそれぞれに出される。次に老中から順に土器に酒が注がれ、三杯飲み、餅や熨斗鮑は持参の袋に入れる。『徳川実紀』などに記述されている「餅酒賜ふ」は、このように行われていたのである。杯事が終わると、留守居を始め、雁之間と芙蓉之間にいた者たちが菊之間の縁類に移り、高家、詰衆、奏者番の順で老中に祝儀を頂いた礼を述べる。この時、諸役人も

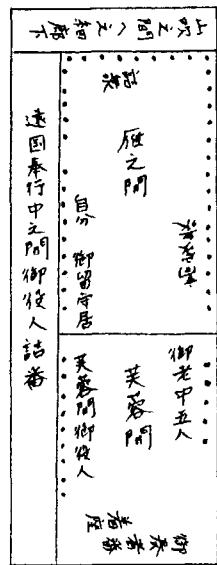


図2 『大岡越前守忠相日記』  
延享元年十月廿一日条  
〈筆者による転写〉

祝儀の言葉述べたという。留守居の隣に着座した自分を始め、出席者の座席が図にも描かれている。いずれ自分が奏者番に就職するのを意識して図解したのかもしれない。また、幕府側の史料には現れないが、寛保元年（一七四一）から役儀で登城している者たちの大目付への伺いが不要になるという<sup>(65)</sup>。職務が儀礼で妨げられることを、少しでも減らすためであったのだろうか。

次に、鈴木修理長頼（明暦元年（一六五五）～宝永二年（一七〇五））の場合を見てみよう。長頼は大工頭で二百俵二十人扶持という旗本である。その日記を見ると、三回ほど、誕生日の祝儀をもらった記録がある<sup>(66)</sup>。しかし、その記述は簡単で、杯事に参加して老中に礼をした様子が感じ取れない。例えば、延宝五年（一六七七）八月三日条には

巳刻、三人連二而登城、昨日大奥見分様子、又、今朝但馬守殿江長常公御越、先日指上候増上寺御成書院之御差図、御好有之付、則直し、今日差上、但馬守殿御請取、紙請取候義、今日相済、退出、尤

今日御誕生御祝儀（家綱）被下、退出（傍線筆者）とあり、仕事で登城し、たまたま將軍の誕生日だったので祝儀を頂いてきたように見える。大工頭は御目見以上ではあるが布衣ではないので、祝いの場に出ることはなかったが、何らかの形で祝儀が配られていたということではないか。

將軍の孫の誕生日の例になるが、『有徳院殿御実紀』に面白い記事が

あるので挙げておく。元文三年（一七三八）六月二日、前月二十二日にあった家治の誕生日祝儀で下賜された酒に酔い、時の太鼓を打ち間違えた太鼓役の主人（本人も）が処罰されるという事件があった<sup>(67)</sup>。この誕生日当日の記録によれば、「酒井雅楽頭忠恭（大坂城代家治鑑刀役）、土岐丹後守頼稔（所司代）、松平和泉守乗祐（嫡子家治矢取役）ならびに西城につかふまつる布衣以上見参ゆりし人々<sup>(68)</sup>」が餅をもらっている。太鼓役は御目見以下であり、西丸同朋頭であった主人も布衣以上ではない。しかし、同朋頭は、將軍の出行に従ったり、老中や若年寄と大名などとの取り次ぎを行ったりする役にあった。坊主衆であった太鼓役も、取り次ぎや交渉を行う殿中の「潤滑油」的存在であったという<sup>(69)</sup>。西丸でもその構図は恐らく同じで、西丸同朋頭は、西丸の家重、嗣子家治にとつて身近であり、太鼓役も禄高は低い、城内で重要な位置を占めていたと思われる。それで、この日祝儀を得て、大酔するほど酒を飲む事態になったのだろう。その日登城していた西丸御用の譜代大名、旗本、御家人はみな祝儀を得られるようになっていたのではないだろうか。そして、このことは將軍の誕生日祝儀にも本丸で当てはまるであろう<sup>(70)</sup>。

これらの例から、老中（大老）以下布衣以上で殿中の祝儀に出席できる身分の者は職務の有無に拘らずそのために登城し、それ以下の者は職務で登城した場合に酒などをもらっていたと考えられる。

誕生日の祝儀に与ったのは、老中、詰衆や幕臣だけではなかった。例えば、綱吉は護持院隆光にも祝儀の品を贈っていたのである。五十歳や六十歳の賀の時以外は目見えはしていないようだが、隆光は綱吉の誕生日には必ず登城し、餅や縮緬など、老中らがもらう祝儀よりも高価なものを贈られている。その上、『隆光僧正日記』元禄十二年（一六九九）正月九日条に、「四つ時登城、今日、御誕生日之御祝儀故、縮緬十巻拝領之、又如例御餅壹荷被下之、三之丸様分御餅三方三飴被下之」とあるように、桂昌院からも綱吉の誕生日祝儀を受け取っているのである。

將軍の嗣子の誕生日も御前でごく近い人々が祝ったと考えられ、嗣子付きの者たちを中心に餅や酒が下賜されたが、特徴的なのは、嗣子の篋刀役、墓目役、矢取役の姿が目につくことである。宝暦十三年（一七六三）十月廿五日の家基の誕生日を見ると、「若君はじめての御誕辰なればとて、布衣以上出仕して餅、酒を賜はり、それより下の群臣は、上宿の者ばかり賜はり、見え奉る事を得ざる者には、酒をたまはる。酒井雅楽頭忠恭、（酒井）備前守忠仰もめして吸物、酒、餅を賜はる」とあるように、老中で家基の墓目役の忠恭だけでなく嫡子の忠仰まで矢取役を務めたという理由でか、召されている。嗣子の誕生日ということ、誕生にも立ち会った最も信頼すべき家臣を出仕させて、餅や酒を与えたのではないだろうか。

編纂上の理由で『統徳川実紀』の記述は、時代が下がるほどに詳しく残っている。幕末の安政元年（一八五四）四月十五日には「老中始、高家、詰衆、御奏者番、御留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上御役人并御目見以上、当番、詰番、有合之面々」に餅、酒が下された<sup>(73)</sup>とあり、まさに城に居合わせた者全てが対象だったようである。だが、約二百三十分の將軍の誕生日祝を様々な史料から見えてきたが、そこには外様の姿が全くない。殿中での祝儀に参加しないのはもちろん、個別の献上なども見られない。餅が下賜されるという点で似ている玄猪の祝儀には、藤堂や有馬など数家の外様大名が特別に出仕しているが、誕生日の場合にはそのような例はない。すなわち、誕生日の祝儀は、將軍（またはその嗣子）と、大老、老中、詰衆を務める譜代大名、旗本、御家人の間を関係づける儀礼であったと考えられる。御三家に対しては、家綱の幼少時に時折肴などが贈られたり、御三家側から献上があったりしたが、その後はほとんど現れない。

誕生日の祝儀に外様の参加はないと述べたが、外様の大名も全く無関心、無関係というわけではなかった。山本博文氏が紹介する萩藩江戸留

守居役福岡彦右衛門の日記によれば、寛永十九年（一六四二）八月四日、彦右衛門は、普段世話になつてゐる老中の松平信綱が前日の家綱の誕生日に祝儀をもらったことを祝して、信綱に刀と茶入れを進上している。このように、祝儀の祝儀という形ではあるが、外様藩にも若干の影響はあったのである。

#### 第四節 家康死後の誕生日

家康の誕生日が殿中で祝われた記録はないが、その死後に特別な日として扱われることになる。『大猷院殿御実紀』の正保三年（一六四六）十二月廿六日条に「けふは東照宮の御誕辰なればとて、二丸 内宮に参らせ給ひ、酒井讃岐守忠勝はじめ、諸老臣に熨斗鮑并祝酒、餅を給ふ」という記事がある。家康の誕生日に家光が二丸東照宮に参詣し、大老の酒井忠勝以下の老臣が、祝の熨斗鮑、酒、餅を賜わっているのである。この行事は家光が死去するまで毎年続けられている。例えば、慶安三年（一六五〇）の同日条に

東照宮御誕辰にて、大納言殿本城へわたらせ給ひ、御座所にて御対面あり。御祝の餅、酒進らせらる。囃子喜多七大夫つかまつる。高砂、軒端梅、狸々三番なり。保科肥後守正之（会津藩主 家光異母弟）、酒井河内守忠清（家綱付き）、酒井讃岐守忠勝、堀田加賀守正盛（六人衆）、松平和泉守乗寿（奏者番）に侍す。営中伺候の輩へ餅、酒給はり、猿樂等は西城にて時服かづけらる。

とあるように、家光が家綱と対面し、祝の餅が出て、杯事を行っている。近臣の他に保科正之が侍っているが、「営中伺候の輩」には目見えはなく、將軍の誕生日と同様に餅と酒を賜わっていたようである。

家光の家康に対する信仰は並々ならぬもので、守袋の中に夢に出てきた家康の様子を記した紙を入れていたほどである。東照宮への思いから、正保三年四月には日光に奉幣使が派遣され、六月には毎年の派遣が

決まった。また、この年八月に病を発症した家光は、様々に療養したが効果が見えなかったところに、日光の供米を頂いてから具合がよくなったと述べている。<sup>(77)</sup>このように、正保三年は家光にとって家康への信仰を更に強めた年であり、その延長線上に家康の誕生日祝があったのではないか。そして、祖である家康の誕生日にも殿中の者に下賜をすることによって、正当な後継者たる家光自身の権威をも高めようという考えもあったのかもしれない。だが、家綱の治世になると、この行事は行われなくなる。

吉宗在職中、家康の誕生日は再び注目されることとなる。吉宗も家康への信仰が厚く、また、行事の復古にも熱心だった。儒者の室鳩巢に、祖先追孝の祝典について中国の故事を調べさせ、鳩巢が、明の始祖の誕生日を歴代の子孫が祀っていたことを報告すると、吉宗はその行事を行うことに決めたという。そして、家康生誕百八十年の享保七年(一七二二)、生まれた年と支干が同じであるということで、家康の誕生日祝が行われることになった。<sup>(78)</sup>『有徳院殿御実紀』から、その様子を見てみよう。<sup>(79)</sup>

東照宮御誕生日なるに、ことしは支干相当せしをもて紅葉山の御宮に戸田山城守忠真(老中)代参し、溜詰、高家、譜代衆、雁の間詰、奏者番、菊の間縁詰、諸番頭、諸物頭、布衣已上出仕し、白木書院にて拝謁し奉り、各盛饌をたまはり御祝あり。よて駄使にて日門、紀伊黄門(宗真)に二種一荷をくられ、尾水両卿(継友・宗堯)には安藤対馬守信友(老中)御使して二種一荷をつかはさる。この両卿よりもおなじくたてまつり物あり。また儒役林大学頭信篤、(林)七三郎信充賀文をたてまつる。この時直清(室鳩巢)がたてまつりし文は、頌中に規をかねて、いとゆ、しくつくり出たるとて、ことに御感悦ありしときこえし。

老中が紅葉山に代参し、譜代大名や高家、布衣以上の者たちが白書院で

吉宗に拝謁し、膳部を頂いて祝を行った。將軍と御三家との贈答があり、儒者が賀文を奉った。溜詰の大名が出席していることや御三家が関与していることも、普段の將軍の誕生日よりは規模が大きい行事であることを感じさせる点であるが、決定的な違いと思われるのが、將軍への拝謁があるということである。言わば徳川家譜代の家臣たちに、祖家康の誕生日に出仕させ目見えをさせることにより、改めて將軍家に対する忠義の気持ちを思い起こさせるという意義を持った儀礼であったと言えるか。現職將軍の誕生日は、將軍個人の祝が身の周りで仕える者にまで発展したような形であるのに対して、家康の誕生日祝儀は將軍自身も参加する徳川將軍家の家の行事であった。

家康の「支干相当」誕生日祝はこの後、生誕二百四十年の天明二年(一七八二)と、三百年の天保十三年(一八四二)の二回、ほぼ同じように続けられている。<sup>(80)</sup>天保十三年の折には、家慶と家定が自ら紅葉山に詣で、祝の能楽も催されている。明の模倣である部分とはいえ、既に他界した人物の誕生日に祝儀が行われるほど、誕生日は身近なものだったのである。<sup>(81)</sup>

## ②公家の誕生日

### 第一節 一条輝良の誕生日

次に、公家の誕生日の様子を見てみよう。まずは、「はじめに」で触れた一条輝良の誕生日について検討してみたい。

輝良は関白一条道香の長男で、宝暦六年(一七五六)九月十七日に生まれた。寛政三年(一七九二)から同七年十月十四日に没するまで関白を務め、尊号事件の中心人物となった。この輝良の日記が『輝良公記』である。<sup>(82)</sup>明和六年(一七六九)十一月から寛政七年十月まで残るが、明



和七年八月〜十二月、安永元年（一七七二）三月〜同三年、同八年五月〜十二月を欠く。以下の史料は、特に断らない限り『輝良公記』を用いる。

輝良は、ほぼ欠かすことなく自分の誕生日を祝い、二人の息子や叔母の誕生日にも熱心だった。輝良自身の誕生日を次にいくつか挙げる。

安永六年九月十七日「此日余誕生日也。仍 上御霊社江代参遣典膳也。干肴往来如例宝林干肴献此方茂同断遣也。左兵衛分體蛤一折献是又如例也」

天明二年（一七八二）九月十七日「此日余誕生日也。仍上 御霊社江代参近臣也。余就誕生日夕膳祝如嘉例干肴往来是又如每例。家僕へ給祝酒也。宝林春安へ給料理云々」

寛政四年九月十七日「上御霊社代参下官誕生日嘉儀等如例云々」

輝良の誕生日は、上御霊社に代参を遣わし、恐らく親族や友人との間であると思われるが、干肴のやりとりをし、祝宴を開き、家僕に祝い酒を振舞うのが平均的なあり方であったようである。誕生日の三日後の九月二十日に、東福寺から寺務を司る維那が祈祷の書を持って訪れるので、この書に書き加えをして維那に馳走をする。安永六年九月廿日条にその様子が見える。「東福寺維那来、於書院見之誕生日之祈祷暑（ママ）持参、朝臣二字加候。返之口祝遣次々而給料理<sup>二汁菓子茶也</sup>」そして、その翌日か翌々日に、東福寺において誕生日の祈祷として大般若経の転読が行われ、輝良はこれも「此日於東福寺常楽庵下官誕生日祈祷大般若経令転読。仍為代参弘澄遣之狩衣。尤転読以前有拜事不及焼香沙汰也」（安永九年九月廿二日）と、代参で済ませている。上御霊社への信仰は厚く、二十年分確認できる誕生日のうち、十九回は上御霊社に代参を遣わしている。東福寺での祈祷も十五回見られ、恒例であったことが分かる。

ここで冒頭に挙げた、天明六年の家治死去時の様子を見てみよう。この年九月八日に家治は没するが、その一報が京都に届くのが同十二日であ

ったようで、この日に鳴物普請停止、諸事穏便、殺生禁止、魚棚見世商売差扣の触が出る<sup>(83)</sup>。輝良は同十七日に「今日雖下官誕生日依廢朝之間嘉儀闕為明日之沙汰云々」と記し、誕生日祝を一日延期する。しかし、翌十八日になっても前の触によって魚類の店は営業を控え、野菜などの市も「穏便」に抵触することから立っていない。祝膳の食材を手に入れられなかった輝良は、祝を「仍不得止延引」することになる。二十日には例年通り、東福寺の維那がやって来る。二十二日に渡世の魚鳥獵、魚鳥商売が解禁となり<sup>(84)</sup>、二十五日に嘉儀と上御霊社代参が行われたのである。

輝良にとって誕生日は欠かせない年中行事の一つであった。家治死去時に祝を延期したのも「諸事穏便」に厳密に従ったからではなく、食材不足のため仕方なくのことであり、それだけ誕生日祝を重視していたのであろう。

次に、輝良の子供たちの誕生日はどのような様子であったのだろうか。長男忠良（安永三年三月二十二日生まれ）の誕生日は、生まれてからほぼ毎年祝っており、二十年分見ることが出来る。安永八年三月廿二日条「此日益公誕生日也。仍 上御霊社江代参近習者也。右二付夕膳祝酒肴等如例家僕江祝酒肴了」や、寛政五年三月廿二日条「忠良生日上御霊社代参奉近臣云々。嘉儀一如例云々」のように、上御霊社に代参を遣わし、祝宴を開いて、家僕にも祝酒や肴を振る舞い、父輝良と大差のない祝い方であった。何度が延期になっているがやはり取り止められることはなかった。例えば、安永六年には新女院（輝良叔母）の母が死去した喪のために、ひと月も祝が延ばされ、四月二十二日に次のように行っている。「益君延引之誕生日祝有之凡如例云々」<sup>(85)</sup>

次男実韶の生まれた年は不明だが、天明二年の忠良の誕生日に「久公四日分延引」として共に祝われたのが、実韶の誕生日祝の初出である<sup>(86)</sup>。三月四日は輝良の母（香蓮院）の法会が行われる精進日で、祝事ができ

なかったために兄の分とまとめて行ったものと思われる。天明五年から独立して祝われるようになり、上御霊社への代参などを行っている。例えば、天明九年三月四日「上御霊社代参奉之入公儀近臣云々。干着往来如例了。祝是又如例云々」などである。概ね毎年祝っているが、嗣子でないためかやや小規模な祝である。

最後に、輝良は叔母の誕生日も祝っていた。この叔母は新女院と呼ばれ、桃園天皇（延享四年（一七四七）～宝暦十二年在位）の中宮で後桃園天皇の生母となった恭礼門院富子である。輝良は着などを贈り、富子も誕生日を祝して輝良に干鯛や酒を遣わしている。明和八年二月四日条を見ると、「准后（同年七月九日に院号宣下）自今日御誕生日二付、目錄之通為御祝詞等いたゞき干鯛一箱御酒一樽被送候。此方々茂右之為祝儀目錄之通干鯛一箱遣也」とある。輝良と富子の結びつきは強く、誕生日の贈答は輝良が没するまで毎年続けられた。（富子も同年死去。）

このように、近世後期を生きた公家一条輝良にとって誕生日はとても身近なものであり、自分や親族の誕生日を毎年祝うことは当たり前のような習慣であった。

## 第二節 公家の誕生日

近世の公家の中でも、輝良だけが誕生日を意識していたのだろうか。本節では他の公家の誕生日を見てみたい。取り上げるのは、西洞院時慶、土御門泰重、勤修寺経慶、一条忠良、近衛忠熙、一条忠香である。

近世初期に生きた時慶や泰重の誕生日は、簡素なものであった。時慶（天文二十一年（一五五二）～寛永十六年（一六三九））の誕生日は『時慶卿記』<sup>(87)</sup>に二、三年おきに記され、十二年分確認できる。慶長十五年（一六一〇）十一月五日条に「誕生日ノ祝餅酒ヲ上下家中へ」とあるように、誕生日を祝って餅や酒を家中に振舞っている。また、以下のように「一、宣旨（時慶女）ヨリ生鯛一双被送、何ヘモ赤飯送。徳十左衛門

夫婦一十郎等来祝也」（寛永十五年十一月五日）娘から鯛が贈られたり、親類、友人に馳走したり赤飯を贈ったりもしている。<sup>(88)</sup>寺社への参詣（代参）が見られないことが、時慶の特徴である。

泰重（天正十四年（一五八六）～寛文元年（一六六一））の誕生日も『泰重卿記』<sup>(89)</sup>に二、三年おきに十例見ることができ、寛永六年正月八日の例を見てみよう。「予飯後依誕生日御霊社へ参詣也。別当法眼へ三十疋遣候。神前被参候」このように、時慶とは反対に御霊社への参詣だけが行われ、酒宴や家僕への振舞いはなかったようである。「祝」という言葉も現れない。<sup>(90)</sup>

時慶も泰重も、自分の誕生日は意識して何らかの行事を行ってきたが、息子などの家族の誕生日に関しては、管見の限りでは特別なことはしていなかったようである。

勤修寺経慶は、武家伝奏を務めた経広の長男で、正保元年（一六四四）十二月十八日に生まれ、宝永六年（一七〇九）一月十日に没した。経慶の日記は『勤慶日記』<sup>(91)</sup>といい、万治元年（一六五八）から宝永五年まで残っている。経慶も誕生日を祝うことには熱心で、自分の他に息子と孫の誕生日を祝っている。経慶の誕生日は、

元禄七年（一六九四）十二月十八日「今日予誕生日、例年母堂其外則地下来会処、当年時儀故神供斗供肴二種母堂進上候処、推而夕前仍餅飯勸盃家□饗。從母堂御霊供米鮎一箱被下也。弁婦来会從子以宮内御霊社代参地下出入□一人も不参客札河内父子不参、玉井監物半□□谷不法□来不快也」

元禄十二年十二月十八日「早天以内匠御霊社神楽捧也。供米頂戴於家内餅神酒肴備也。從母堂如例御霊祓供米肴小鮎被下。玉井依所勞半忠御使也。從宰相夫婦生鯛一折送。餅、吸物祝肴（後略）」

と、御霊社に神楽を奉納し、供米を頂き、母親や息子、友人などから魚類や果物を贈られ、友人を招いて酒宴を開き、家来にも振舞いをする一

日であった。経慶の誕生日はほぼ毎年確認でき、日記で費やされる枚数もかなり多い。誕生日を重視していたと考えられ、両親の喪中でも鳴物停止令が出ていても、なし崩しの祝が行われている。<sup>(92)</sup>元禄元年の例を挙げておこう。

十二月十八日「今日、予誕生日也。例年祝儀則入□濟之參雖然今年重服仍一切停止 之処、并令饗仍儀少々來儀也。□□三位勘解由入來弁部也。始而饗ニ□也。仍予為祝 儀刀一腰東國□肴一荷遣。乳母小袖□二百疋。安竹羽織遣也」

子供などの誕生日については、経慶は長男尹隆（延宝四年（一六七六）八月十日生まれ）の誕生日に、次のように「頭弁今日誕生日為祝儀餅送候間、及暮祝着干時頭蘭入來候間、幸相伴遣盃事。」（元禄八年八月十日）餅を贈り、盃を交わしている。宝永四年と五年には、尹隆の長男高顯（元禄八年七月二十一日生まれ）の誕生日が確認できる。宝永五年の記述を見ると「侍從誕生日祝儀<sup>(93)</sup>」とあるだけで、経慶との関係が離れるほど、誕生日の祝が簡素になっていくことが分かる。

また、宝永元年、経慶は還暦を迎えるが、その年は誕生日の干支までが偶然にも生まれた年の干支と同じ甲申であった。経慶は「予誕生日、殊年日甲申間別而心祝儀添気味<sup>(94)</sup>」と記し、格別にめでたく思っている様子が伝わってくる。

次に、一条輝良の長男忠良の例を見てみよう。忠良の誕生日は『輝良公記』の中で輝良の子として祝われていたが、忠良自身が自分の誕生日をどのように過ごしていたかということが、『忠良公記<sup>(95)</sup>』によって分かる。『忠良公記』は天明八年（一七八八）から残っているが、欠ける月のある年もあり、寛政四年（一七九二）から文化九年（一八一二）までほぼ完全に見ることができる。

この日記によれば、忠良は父輝良が没するまで自分の誕生日を自分で祝っていない。『輝良公記』と『忠良公記』において忠良の誕生日は、

重なって記述されていないのである。寛政八年以降は毎年欠かすことなく忠良は自分の誕生日を祝っている。忠良の誕生日は恒例の花見の日に当たっていたようで、その宴と誕生日の祝宴が兼ねられた。享和二年（一八〇二）三月廿二日条に

此日余生日ニ付上御靈社代參近臣奉之。内々嘉儀ニ付一統家僕へ給祝酒、母公御方生魚給也。嘉儀ニ付御入<sup>此日花見典同斷行之料理飯酒等程々</sup>献之。彼方三ノ間ノ者迄給酒饌如例年。及入夜有□歌也。

とあるように、御霊社に代参を遣わし、母親から贈物をされ、家僕に祝酒を振舞っている。例年誕生日の前日には祈禱の文を持って維那が訪れていたように、この誕生日のあり方は輝良と変わらない。忠良の特徴といえは、文化五年頃から狂言を催しているのが何度か見えることである。例えば、文化七年三月廿二日条に「（前略）余生日嘉儀并花宴等相加、母公御入如例進料理祝酒等。入夜狂言有之<sup>三宅三郎藤九郎乙九郎以下七人斗來之。家僕以下給祝酒之</sup>」とある。

忠良の誕生日で興味深いのは、享和二年二月二十二日の以下の記事である。「此日余生日祈禱於東福一山令執。但<sup>此三月間執三付。但此日執行也</sup>」例年、忠良の誕生日の祈禱は当日東福寺で行われ、維那は前日の三月二十一日に、祈禱文に加筆をしてもらうため忠良を訪れる。しかし、この年は三月に東福寺の開帳が行われることになっており、忠良の祈禱ができないということが分かっていた。そこで、ちょうどひと月前の二月二十二日に祈禱が行われたのである。この変更は、恐らく事前に東福寺側から知らせてきたのであり、三月になってから延引したのではないところにも周到さを感じる。つまり、寺には決まった日に祈禱をする人の名簿があり、毎回それに基づいて洩らさぬように祈禱文の持参も行われていたと考えられる。このひと月前への変更も、それ故に円滑にできたことであろう。こうした契約が少なくとも父子二代に亘って何十年も続いていたということは、誕生日の行事が公家にとっても寺にとっても、それだけ馴染み深

いものであったことの表れではないだろうか。

次に、幕末の公家であり近衛家最後の関白となった、近衛忠熙（文化五年～明治三十一年（一八九八））を取り上げる。忠熙には文政三年（二二〇）から明治十一年まで続く膨大な日記が残されているが、初めの方は各月が揃っておらず、誕生日が確認できるのは嘉永の末頃からである。日記の嘉永六年（一八五三）七月廿一日条を見ると、「一、御誕生日ニ付御霊江御代参表分例年之通。放生供安禪寺参上例之通」とあり、御霊社へ代参を遣わし、放生供養を行っていたことが分かる。また、忠熙の誕生日は七月十四日であったが、長い間二十一日に祝われていた。それが、慶応元年（一八六五）に、「一、御誕生日ニ付放生供養例年之通参上 安禪寺 放生雀 是迄廿一日之故、今日真実御誕生日ニつき当年分今日あらはす也」このように改められている。忠熙の場合が放生供養であるように、公家の誕生日のあり方にはそれぞれ個性がある。

最後に、一条忠良の嗣子忠香の誕生日を見ておこう。輝良の孫でもある忠香は、文化九年二月十三日に生まれたので、『輝良公記』にも『忠良公記』にも、その誕生日は現れない。忠香の日記は『一条忠香日記抄』として刊行されているが、ここでは誕生日に関する記事を見ることができない。しかし、安政五年（一八五八）分の日記が、『璞記』という名で東大史料編纂所に保管されているのでこれを見ると、忠香とその子女の誕生日を確認することができた。忠香の誕生日は

今日予誕生日祝有之。雖神事、中森澤丹後介宅分東福寺へ代参相勤、又宅へ帰ル様ニと申遣事。昼小豆飯焼物なます煮物等如例出之事。右ニ付上御霊社へ代参右近相勤之事。御札受帰ル也。

と記され、東福寺との関係も続き、上御霊社にも家臣を派遣している。誕生日に小豆飯やなますなどを食べるのが恒例だったようである。長男実良の誕生日にも、上御霊社に代参を遣わしている。また、娘と見られる人物の誕生日の記事を見ると、「来四日順子誕生日祝之処御構中

ニ付、今日内々小豆飯焼物なます煮物等祝之。初度ニ付上御霊社へ代参貫名右近御札受帰ル事」とある。このように「初度」という語に「タシヤウニチ」と振り仮名が振ってある。忠香が初度という漢語を、わざわざ振り仮名を付けても使いたかつたのだろうか。また、このことから当時の人々は「誕生日」を現在とは異なり、「たんじょうにち」と発音していたと分かるのである。

以上、一条輝良も含めて七人の公家の誕生日を見てきた。近世中期の公家を見ていないことや、七人のうち三人が親・子・孫の関係にあることなど、偏りがある点は否めないが、近世の公家の誕生日行事を、大枠でつかむことはできたのではないだろうか。個人差はあっても、公家たちが自分や周りの人の誕生日を意識していたことは間違いないことである。今回は、既に分かっている誕生日の部分しか史料を見ていないので、限なく見れば庶子や知人の誕生日がまだ見つかるかと推測される。例えば、『忠良公記』享和三年八月十五日条に、「談山（多武峰社の神職か）御生日ニ付供神膳参社如例勤之」と、家族以外の人物の誕生日が記されているのが見える。このように、他人の誕生日に贈物をしたり、子供や孫の誕生日を祝うのは、日常的なことであった。だが、公家たちは毎年自分の誕生日祝を最も盛大に行った。周りに贈物をもらったりするだけでなく、自己の誕生日を積極的に祝ったのである。寺社へ代参を遣わすことや、家僕にも祝酒を振舞うことも、誕生日という行事を自ら主催しているという表れではないか。公家にとつての誕生日は、家中で行われる年中行事の一つで、節句と同じように生活の中に組み込まれていたのである。

### ③その他の誕生日

ここまで、將軍と公家の誕生日を見てきたが、その他の階層の人々

は誕生日をどのような日と考えていたのだろうか。誕生日を祝う習慣があったのだろうか。

## 第一節 天皇の誕生日

まずは、天皇の誕生日について考察する。「はじめに」で少し触れたが、天皇の誕生日は、基本的に毎月祝っていた。(表2参照)『後水尾院當時年中行事 下』には、誕生日に行うことが次のように記されている。<sup>(10)</sup>

一、御誕生日には千巻心経をよませらる、女中の人数二よりて配分ある也、上中下の員数差別あり、たとへは上臈分の人五十巻、中臈分四十五巻或は三十五巻、下臈は二十巻或は三十巻なとやうなり、毎月の事なり。

一、御誕生日の御祝は、れんたいにて、へた／＼のかちんにて、御さかつき一献まるる、院、女院などへも御いはひ旨ル。

女官が千巻心経を誦み、小豆餅(へた／＼のかちん)が出て杯事をする。そして、天皇から院や女院などへ祝儀が贈られた。『お湯殿の上の日記』の記述では、誕生日祝は毎月のもは簡単に行われ、正誕生日は盛大であったようである。<sup>(10)</sup>『お湯殿の上の日記』によれば、天皇だけではなく皇太子や皇子皇女の誕生日も餅などで祝われていたが、正誕生日だけであった。

これらの史料では天皇の誕生日は内々で祝われ、公家の日記でも天皇の誕生日に関する記事は見られないことが多い。しかし、『光豊公記』慶長十二年(一六〇七)二月十五日条や慶長十五年二月十五日条に「夜二入御誕生日(後陽成天皇 十二月十五日生まれ)ノ御祝有之、五辻モ祇候」(今日主上(同)御誕生日、被召ヲ(カ)依所旁不参候<sup>(10)</sup>)とあるように、公家が祝儀に召されている例もあり、今後検討する必要がある。

## 第二節 上級武士の誕生日

上級武士の誕生日については、あまり史料に当たることができなかったが、大名の誕生日の例をいくつか挙げておきたい。

まず、秋田藩主佐竹義宣の誕生日が、藩主梅津政景の日記に記されている。<sup>(10)</sup>寛永四年(一六二七)七月十六日条に「一、御城二而 御誕生日(佐竹義宣)之御祝有、拙者式も罷出候」とあるように、城で誕生日の祝儀が開かれ、家臣が出席していた。寛永八年の同日には「一、如毎年之御具足之餅御祝有」とあるが、恐らくこれも義宣の誕生日祝であったと考えられる。というのも、『秋田藩年中行事』<sup>(10)</sup>という史料の中で、誕生日らしき行事において家臣に餅が下賜されているからである。この史料には、秋田藩の一年の行事が元旦から順に、乾坤の二冊に亘って記されており、内容から文政期以降に作られたものと考えられる。その七月十七日の項に、「御代ニ依て違ふ」と書かれ、藩主が出御し、側方・表方・番方などの家臣が目通りして餅、酒を賜わるという内容の行事があるが、七月十七日は、文化十二年(一八一五)から弘化三年(一八四六)まで藩主を務めた佐竹義厚の誕生日である。主出御の有無は異なるが、行事の内容が將軍の誕生日とよく似ており、日付が代によつて違うという記述もあることから、秋田藩の歴代藩主の誕生日の行事は、このように行われていたと考えてよいだろう。

『新井白石日記』には、甲府藩主時代の徳川家宣(綱豊)の誕生日が記されている。<sup>(10)</sup>元禄十四年(一七〇一)四月廿五日条に「今日 御誕生日之御祝儀」とあるから、白石は出仕していないものの、城では祝儀が行われたことが分かる。また、『南紀徳川史』には、十代紀州藩主治宝が誕生日祝儀を行ったことが記録されている。<sup>(10)</sup>嘉永三年(一八五〇)六月十八日条に「御誕生日二付、御八十御賀御含ニテ御附屬且御用兼帯之面へ被下物等有之」とあるように、藩主付きで役職にある者に下され物

表2 天皇誕生日表(『お湯殿の上の日記』にみる天皇の毎月の誕生日 後陽成～東山)

後光明 3. 12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
寛永 10～19	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛永 20～承応 3	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
後西 11. 16	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
寛永 14～承応 2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
承応 3～寛文 3	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛文 4～延宝 2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
延宝 3												
4											○	
5											○	
6											○	
7											○	
8											○	
天和 1											○	
2											○	
3											○	
貞享 1											○	
2			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
霊元 5. 25	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
承応 3～寛文 2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛文 3～延宝 2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
延宝 3											○	
4	○		○	○	○				○	○		
5	○	○	○	○	○			○	○	○	○	◎
6	欠			○	欠	○	○	○	○	○	○	
7	欠			○	○	○	○		○	○		
8		○	○	○	○		○	○	欠	○	○	○
天和 1				○	○	○				○		
2	欠	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
3		○	○	○	◎		欠		○			欠
貞享 1			○		○		○			○	○	
2				○	○	○						
3				○				○				
4				欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
元禄 1～享保 17	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
東山 9. 3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
延宝 3												
4												
5												
6												
7									○			
8												
天和 1									○			
2									○			
3												
貞享 1									○			
2									○			
3												
4				欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
元禄 1～宝永 6	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠

○印…祝のあった月  
◎印…閏月だけ祝があった  
◎印…正の月と閏月の両方に祝があった  
太枠内は在位中

後陽成 12. 15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
元龜 2～天正 7												
天正 8												○
天正 9～天正 13												
天正 14												○
15		○			○				欠	欠	欠	欠
16	○	○			○	○	○		○			
17		○			○	○	○	○	○			○
18	○	○	○		○		○	○	○		○	○
19	○	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
文禄 1～3	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
文禄 4		○								欠	欠	欠
慶長 1～2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
慶長 3	○	○			○						○	○
4		○	○	○	○			○	○			
5		○	○	○						○		○
6			○	○				○			○	○
7												
8		○	○		○			○				○
9	○	○										○
10												
11												
12		○		○								
13		○										○
14		○						○		○	○	○
15	○	○		○	欠	○			○	○	○	○
16	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
慶長 17～元和 3	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
後水尾 6. 4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
慶長 1～2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
慶長 3～5												
慶長 6						○						
7												
8												
9												
10												
11												
12												
13						○						
14												
15						○						
慶長 16～寛永 1	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛永 2	○					○	欠	○	○	○	○	○
寛永 3～6	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛永 7～延宝 2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
延宝 3～8												
明正 11. 19	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
元和 9～寛永 1	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛永 2											○	
寛永 3～5	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
寛永 6～20	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
正保 1～延宝 2	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
延宝 3											○	
4											○	
5											○	
6											○	
7											○	
8											○	
天和 1											○	
2											○	
3											○	
貞享 1											○	
2											○	
3											○	
4				欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
元禄 1～9	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠

があった。傘寿の祝を兼ねてのことであつたので、他の年も、また他の藩主も誕生日に行事をしていなか否かは分からない。

大名が息子の誕生日を祝っている姿が見えるのが、『池田光政日記』<sup>(10)</sup>である。光政は、長男の綱政の誕生日を一度だけ次のように記している。「一、晩二伊与（綱政満十八歳）所へ如嘉例振る舞い、福様（福照院光政母）御出、誕生日ノ祝かた／＼、礼衆十人」（明暦二年（一六五六）正月五日）綱政の誕生日は正月五日であるため、正月恒例の振舞いと兼ねて祝ったようだ。光政の日記は飛んでいるところも多いので、毎年このように祝っていたのかもしれない。

### 第三節 下級武士・医師の誕生日

次いで、下級武士や庶民に近い層を見てみよう。本節では四人の武士と一人の医師が記した日記を材料に、誕生日の様子を概観する。

#### 〈朝日重章〉

朝日重章は、近世前中期の尾張藩士である。重章は延宝二年（一六七四）に城代同心の子として生まれ、知行百石の他に元禄十三年（一七〇〇）からは御畳奉行の役料四十俵があつた。重章には母親の違う二人の娘がいたが、どういう訳か正徳元年（一七一）に生まれた後妻の娘あぐりの誕生日だけを、毎年祝っている。重章の日記『鸚鵡籠中記』<sup>(11)</sup>正徳五年十一月七日条に、「アグリ誕生のいわひ、弥四・家内・勘太・分四妻に夕飯出す。文四と久次は暮分来る。友四・勘太の外いづれも夜食出し、亥比帰る」とあるように、重章が普段から親しくしている友人を招き、馳走をしている。この友人たちは毎年顔を見せているようである。<sup>(12)</sup>また、重章自身の誕生日は見えない。

#### 〈石橋生庵〉

石橋生庵は、紀州藩の家老の侍読兼医師である。家老三浦氏の家臣の三男として生まれたが、儒学や医学の能力を認められて三浦氏へ出

仕することとなった。初め年二兩の給金から次第に加増され、元禄八年には三十石三人扶持の給金であつた。<sup>(13)</sup>生庵は、長男と次男の誕生日を日記『家乗』<sup>(14)</sup>に記している。延宝三年九月廿七日条を見ると、「大（ママ）郎吉誕節也。朝饗外姑早女三九郎竹吉兵衛夫婦。飯後婦翁来有酒」とあるように、姑や知人を饗応している。これは長男太郎吉の初誕生の事例であるが、翌年には、「太郎吉誕節也。家室妹来」と、<sup>(15)</sup>記事は簡単なものになり、それ以降は途絶える。次男には初誕生の記録だけがあり、<sup>(16)</sup>他の二男一女の誕生日の記事はない。生庵の誕生日にも何も行っていないようだが、誕生日というものに馴染みがなかったわけではないのであろう。<sup>(17)</sup>

#### 〈渡部平太夫・渡部勝之助〉

『桑名日記』と『柏崎日記』という日記がある。<sup>(18)</sup>桑名藩士渡部平太夫の養子勝之助は藩の飛び地である柏崎に赴任となり、長男鐐之助は桑名に残って祖父母に育てられることになった。柏崎には勝之助の妻やその他の子があり、互いの状況を知らせるために日記が交換された。それがこの二つの日記である。『桑名日記』は平太夫が、『柏崎日記』は勝之助が記した。渡部家は十石三人扶持程度の家柄で、柏崎での勝之助は勘定方や公事方などを兼務した。日記は天保十年（一八三九）二月（『柏崎日記』は八月）から嘉永元年（一八四八）三月まで書かれている。

鐐之助を育てていた桑名では彼の誕生日行事を行った。天保十年十二月八日条を見ると、「鐐之助たんじよう日二つきあかのまゝをたく。どぢやうじるにて留五郎をよぶ」とある。<sup>(19)</sup>また、柏崎では長女、次男、三男のものが行われた。例えば、長女のおろくの誕生日は天保十三年の一度だけが次のように記録され、「今日ハおろくの誕生日ゆへ、あかのまんなまに豆ふ汁が出来申候」<sup>(20)</sup>次男の真吾は満三歳まで毎年行われている。弘化二年（一八四五）四月十一日条に、「真吾の誕生日二付、小豆めし焼き、鯛の切身わらひ煮付致し、御下横目弥兵エも参候よし、呼んで一

盃為吞。運公惣兵エも丁度の所へ参り、四五人にて刺身沢山有之、何れも暮合ニ被帰候」とあるように、小豆飯を炊いて魚を煮、隣人などを招いて宴会をしている。<sup>(11)</sup>次女は誕生日を迎える前に死去し、三男は難産だったために、その誕生日は妻の「命拾ひ日」とも称されている。<sup>(12)</sup>興味深いのは、柏崎でも不在の鎌之助の誕生日を、桑名よりも熱心に長期間行い続けていたということである。<sup>(13)</sup>長男であるということと、離れている我が子への思いが強くなるということの両方からこのような状態になっていたのであろう。ただ、桑名と柏崎の両方で鎌之助の誕生日が記録されている年がないのが不思議だが、偶然であろうか。

赤飯を炊き、神棚に神酒を上げ、料理を作り、近所の人たちを呼ぶのが平均的なあり方であったようである。

#### 〈門屋養安〉

門屋養安は秋田藩の院内銀山のお抱え医師である。養安は寛政四年（一七九二）に生まれ、生涯の大部分を院内銀山町で過ごし、明治六年（一八七三）に没した。天保六年から明治二年までの日記を書き残している。<sup>(14)</sup>この日記では、養安自身の誕生日と、孫たちの誕生日を見ることができる。養安の誕生日は一月八日で、医学の神様である神農を祀る初神農の日であった。この日養安は、藩主直筆の「神農」の書の掛け軸を掲げ神酒と御膳を供えて祀ったが、誕生日について述べられているのは嘉永六年と安政三年（一八五六）の二回だけである。安政三年の例を見ると、「一、初神農、誕生日祝義、昼」とある。<sup>(15)</sup>養安の場合は、毎年初神農と誕生日を合わせた祝儀が行われていたのだろう。

孫の誕生日は、五男三女のうち三男二女のものが見られるが、次男（長男は満一歳で死去）を除いて初誕生しか行われていないようである。次男の誕生日も二回しか現れないので、養安の家では、子供の誕生日に關して基本的に通過儀礼である初誕生だけを祝い、それ以降は余り気にしていなかったのかもしれない。祝い方は簡素で、一例だけ挙げると安

政三年十二月十九日条に「一、才次（泰安（養安養子）三男）誕生日、産神様江神酒・御膳相備候。相之山姥参候。何も肴無之候間、使なし。惣八妻、参候」とあるように、産土神に神酒を供え、内祝いをしていたが、準備が調っているときには、知人を招くこともあった。<sup>(16)</sup>

このように、下級武士や医師など庶民に近い生活を送っていた人々の誕生日を見ると、上級武士や公家とは異なる様子が浮かび上がってくる。上級武士などが当主の誕生日を中心に行事を行っていたのに対して、下級武士たちの視線は、子供や孫といった幼児に注がれているのである。親類や家族と親しくしている人を招いて、ちょっとした馳走を食べている様子は、現代にも通じるものがある。將軍家や公家に見られるような儀礼性は薄く、純粹に子供の無事な成長を喜んでいと感じられる。長男が重視され、庶子の中でも男児の誕生日の記事が多いという点が、近世ならではといえよう。<sup>(17)</sup>

#### 第四節 『諸国風俗問状答』に見える誕生日

次に、庶民にも誕生日の習慣があったのかということを考えたい。個別の例を挙げることはできなかったが、各地方における誕生日の様子を『諸国風俗問状答』<sup>(18)</sup>という史料から見てもみることにする。これは、文化十二、三年（一八一五、一六）頃に国学者の屋代弘賢らが、諸国の風俗を知るために各地方の友人に、四季の行事や冠婚葬祭の様子について尋ねた『諸国風俗問状』への回答である。全国二十二地域の回答が残っているが、「年々誕生日のいはひ如何様」という問いに対しては「祝っていない」という答えを含めて十四地域が回答をしている。そのうち、越後国長岡領と肥後国天草郡は、年々の祝いはないという。

残りの地域を見ると、

陸奥国白川領風俗問状答「町在共に、誕生日には産土神へ神酒を備へ、小豆飯に通例の軽き煮しめなどいたし祝ひ候までに御座候」



出羽国秋田領風俗問状答「陰陽の膳、二膳を供ふ。一方はかならず赤小豆飯なり。姻家などを招き、饗応等異なる事候はず」

常陸国水戸領風俗問状答「常式なし。貴賤貧富にて異也」

三河国吉田領風俗問状答「五歳七歳などの祝ひに異なることなし」

大和国高取領風俗問状答「大概誕生の翌年一度祝ひ候計、年々の祝は貴人其外武家にては祝ひ候、以下は祝ひ不申候」

丹後国峯山領風俗問状答「此儀無御座候旨、町年寄共申出候。但御家中にては、小豆飯・神酒等神棚へ供し、祝ひ候儀御座候」

備後国福山領風俗問状答「年々神棚へ神酒・灯明を供へ、氏神へ参詣仕候のみ事、是さへ大抵は不仕候人多く候」

備後国品治郡風俗問状答「餅搗、神に備へ、隣家親族へ送り、産社へ詣、家内親族盃祝仕も有之。又多は二歳、三歳迄にて止申者も御座候」

備後国沼隈郡浦崎村風俗問状答「当村にては多仕もの無御座候。少々相祝候者も御座候」

淡路国風俗問状答「年々誕生日を祝事は余りなし。所により、毎年餅を搗、赤小豆飯を祝もあり」

阿波国風俗問状答「誕生日は、赤小豆飯にて神祭をいたし、家内祝ひ申候」

阿波国高河原村風俗問状答「誕生日の祝ひの義は、神に御酒・赤小豆飯仕供、家内も祝ひ申義にて御座候」

このように、武士など身分の高い人物しか祝わない、一部の人しか祝わない、祝っても二、三歳までで止めてしまうなどという地域もあるが、毎年決まった祝い方をしているところもある。従って、庶民の間にも、誕生日を祝うという習慣があったことは確かである。その祝い方は、神棚に神酒や餅、赤飯を供えたり、産土神に詣でたり、赤飯などで小宴を開き親類を招いたりというものであった。「五歳、七歳の祝い」や「初誕生」の語などが使われている地域は、誕生日といえは子供のものが中

心となっているようだが、その他の地域では大人の誕生日も祝うのか、子供だけであるのかははっきりしない。

いずれにせよ、諸国の風俗を問う際に誕生日祝いが冠婚葬祭の一つとして認識され、毎年祝っている地域中にもあったという事実からは、誕生日が庶民にとっても全く親しみのない行事ではないということが分かる。近世において、ほぼ全国的に、あらゆる階層に誕生日の習慣は存在していたのである。

#### ④ 誕生日のあり方

近世の人々にとって、誕生日とはどのような意味を持った日であったのか。むろん、身分や階層によって違いはあるだろう。しかし、これまで明らかにしてきたように様々な層の人たちの生活の中に誕生日という考え方、習慣が遍在しているということは、誕生日に対して、共通する考え方や意味付けがあると考えるとよいのではないだろうか。本章では近世における誕生日のあり方を考察する。

まず、本稿で検討してきた様々な人の誕生日を総合して分析し、誕生日にどのようなことが行われていたのかを考えてみたい。

誕生日に行われていたこととして特徴的なのが、産土神への参詣（代参）や寺での祈祷である。將軍の中では家継が、父家宣の産土神である根津権現へ奉納をしている。公家のほとんどが上、あるいは下御霊社に参詣していたが、それは、御霊社が公家の産土神と考えられていたから<sup>(13)</sup>のようである。御霊社は中世以来天皇家の崇敬が厚く、その産土神と奉ぜられ、至徳元年（一三八四）には正一位の神位を授けられた。江戸時代後期には皇子や皇女の胞衣が奉納されたという<sup>(14)</sup>。また、門屋養安や備後国品治郡などの人々も、産土神に参詣して神酒などを供えている。

『古事類苑』神祇部十三「産土神」の章には、「生誕日詣産土神」とい

う項があり、『大江俊光記』から以下の二つの例が挙げられている。<sup>(132)</sup>「元禄十一年（一六九八）四月二日、俊光誕生日、諸神祖拝、朝飯後出京、生神下御霊へ参、次ふや町へ参先祖并亡父拜」「宝永六年（一七〇九）四月二日、俊光誕生日、諸神拝、下御霊へ社参」俊光は信心深かったのか、誕生日に産土神だけでなく諸神や先祖の霊にも参拝している。だが、産土神の解説に、誕生日に産土神に詣でることが例として載っているということは、詣でることがある程度普遍的であったと考えてよいだろう。生まれた土地の守り神である産土神に誕生日に詣でるのは自然なことかもしれない。<sup>(133)</sup>

次に、將軍や一部の公家の間に見られる祈禱について考えたい。將軍家康と秀忠が、寺院に誕生日の祈禱をさせていたことは第一章で述べたが、その後の歴代將軍も殿中で誕生日祝いをを行う一方、金地院々主に祈禱を命じていたようである。例えば、家宣期の正徳元年（一七一）に金地院元晃は、「僧録を命ぜられ、御誕辰の御祈禱をもつかまふまつるべしと仰下さ」れているように、いくつか例がある。<sup>(134)</sup>また、「はじめに」で挙げたように、中世の將軍は毎月の誕生日に祈禱をさせている。<sup>(135)</sup>そして、豊臣秀頼についても、醍醐寺座主の義演が正誕生日に毎年祈禱を行っている。<sup>(136)</sup>このことから、誕生日に祈禱を行うという習慣は、有力な武家にとって伝統的なものであったといえるのではないだろうか。また、公家では、一条家が代々東福寺に毎年祈禱を依頼している。<sup>(137)</sup>

続いて、誕生日の行事で登場する食べ物について見てみよう。まず、最も頻度が高いのが餅、そして酒である。將軍、天皇、公家から庶民まで、全ての階層で用いられた。餅は、正月や節句、祝事などの時に掲かれるもので、酒も行事には欠かせない。<sup>(138)</sup>誕生日が、多くの史料にそう書かれるように、「祝儀」と考えられていたということの表れである。赤飯（小豆飯）も、小豆に魔除けや厄除けの力があるとされ、祝い事や祭の際に食べられた。その赤飯は、公家や下級武士、庶民の誕生日に食べ

られたり、神棚に供えられたりした。また、天皇の誕生日に見える餅は小豆餅であり、將軍の誕生日祝儀の餅にも小豆が添えられた。

この餅や赤飯の食べられ方であるが、単に誕生日の本人が食べているだけではない点に注目したい。大勢の幕臣などに下賜していた將軍はもちろん、公家も家中に振舞っており、庶民は家族や近所の人々と食した。幕末から明治にかけて生きた女性の例を取り上げよう。この女性は紀州藩の儒者川合梅所の妻で小梅という。小梅の日記には、小梅の長男や孫たちなどの数多くの誕生日が出てくる。<sup>(139)</sup>例えば、嘉永四年（一八五）正月四日条に「岩一郎（雄輔）小梅長男）たん生日ゆへ赤飯たきて梅本の家内に酒飯出す」とあるように、赤飯を炊いて親戚に振舞っている。そして、同十三日には「梅本千太郎たん生日ゆへ、赤ま、たべにこひとの事。昼比皆よばれる」と親戚側の誕生日に呼ばれて赤飯を食べている。嘉永六年正月十三日「梅本より赤ま、送らる」のように、赤飯が配られることもあった。

餅や赤飯を自分だけでなく周囲の人にも食べてもらうのは、神への供え物を皆で食べることによって、神と人または人と人との結合を強めようとする共食の考えの表れではないだろうか。<sup>(140)</sup>『備後国品治郡風俗問状答』には、「餅搗、神に備へ、隣家親族へ送り」と、神に供えた餅を隣人や親族に贈っている様子が見える。また、こうした習慣は、餅などを食べてもらうことで幸福、もしくは災いをなるべく多くの人に分担してもらおうという意味をも持つ。<sup>(141)</sup>

これまで考察してきた結果、近世の人々にとって誕生日は「めでたい日」であったと言えることができよう。生まれた日を記念すべき特別な日として、祝っているのである。更に、産土神に詣で、寺院に祈禱を頼み、餅などを神棚に上げたり配ったりしているのは、日頃の無事を喜び、今後も息災でいられるようにという思いを込めていることではないだろうか。儀礼をそれほど重視する必要のなかった下級武士や庶民にとっ

ては、死亡率の高い子供に対して特にこの思いが強かったのではないかと考えられるのである。

今一つ、近世の人々の誕生日についての意識として述べておきたいのが、「年取り」である。満年齢が一般化している現代では、それぞれが誕生日を迎えることに一つ年を取る。これに対して、前近代には正月を迎える際に一斉に年を取っており、そのことが誕生日の習慣がなかったとする根拠ともされていた。しかし、実際には誕生日の習慣は広く存在した。近世にも、誕生日に年を取るという意識があったのであろうか。

『柏崎日記』天保十一年（一八四〇）十二月大晦日条を見てみよう。

朝之内飾り物致し、夫より髪月代也。九ツ過用意出来上り、役所小使角平も呼び、打揃ひ目出度歳取り申候。お六（勝之助長女）もおとなしく膳二向ひ、御神酒小盃二三ツ斗給へル。真赤二なり候。鏝児も定而此節最早年を取て居るだろふト、桑名咄しなから、祝ひ申候。御向で風呂ヲ内で立てなさる。八ツ過二わき候へとも、這入手なし。私も御神酒に酔ひ倒れ、少し寝て起る。七ツ前二湯二入、歳末の札に出る。御陳（マ）内外廻ル。六ツ過二相済申候。

これによれば、渡部勝之助の家族は大晦日の昼過ぎに年を取っている。そして桑名に離れて暮らす長男鏝之助も同じく年を取っているだろうと話している。このようにはっきりと、正月を迎える直前に年を取ることが認識されていたのである。その年も明くる年も鏝之助の誕生日は行われており、一年に二度年を取ることが考えられないので、誕生日には年を取っていないことが分かる。<sup>(18)</sup>その他の史料においても、誕生日に年を取るといふ表現は見られない。つまり、誕生日は、年を取る日とは別の日として行事化されていたのである。誕生日は一人一人が持つ記念日であり、毎年重ねていくというよりは、繰り返すものだったであろう。<sup>(19)</sup>

## おわりに

以上、様々な階層の誕生日について考察してきた。まず、前提として近代以前の日本に誕生日の行事があったことを述べた。そして、冒頭に挙げた例は特殊なものではなく、多くの事例があることを明らかにした。誕生日の習慣は、明治以降西洋文化の輸入とともに広まったものではないのである。近世での時期による変化をあまり考慮に入れることができなかったが、これまで研究のほとんどなかった誕生日のあり方を、概観することができたのではないだろうか。

將軍の誕生日には、殿中で老中以下に餅などを下賜する行事が行われた。祝儀に参加できない身分の者でも、職務で登城した場合には祝の品をもらうことができたようで、將軍と、その下で御用を務めている者の関係を認識させる儀礼であったと考えられる。そのため、將軍の嗣子の誕生日祝儀は西丸を中心に行われたのである。また、大名の誕生日にも藩士が集められ、餅などが下賜された。祝の構造は、將軍と同じであったと思われる。

近世の公家は、誕生日の行事を積極的に行っていた。いくつかの日記を調べたが、どれも必ず誕生日の記事を見出すことができた。公家にとつて誕生日は節句のようなものであり、神仏の信仰とも結びついていた。当主の誕生日を、当主自らが最も盛大に祝い、家僕にも祝酒を振舞う、家の行事だったのである。

下級武士や庶民の誕生日は、家族の行事であった。史料上、当主の誕生日よりも子供や孫の誕生日の記事の方がはるかに多い。赤飯を炊き、家族や隣人と小宴を開いた。幼児の無事な成長を神に祈りつつ祝っていたようである。

近世の人々の誕生日の概念は、個人個人の記念日とも言うべきもので

あった。その日に一つ年を取るのではないが、毎年めぐってくる度に、個人差はあるものの、意識する日となっていたようである。だが、個人的なものであるゆえに、將軍や天皇の誕生日といえども、殿中や宮中を越えた範囲にまでそれを意識させることはなかった。

このような誕生日のあり方は、幕末に変化を見せることになる。開港後の長崎において、將軍と天皇の誕生日は「休日」になったのである。慶応元年（一八六五）に長崎奉行所から各外国官吏宛に次のような文書が出された。<sup>(16)</sup>

休日弁解

（差出 宛名略）<sup>(16)</sup>

過日集会之節運上所休日之儀申入候処、其方ニ而解得ゐたし兼候一廉も有之無抛日柄ニ候は、其訳書面ニ而承度旨被申聞候俟、則左ニ委細を相記し候通、我国の士民に於て欠くへからざる大祝日を弁解いたされ度候。

正月七日 皇帝より庶民に至るまで七種の節会を執行ふ大祝日

四月十七日 創業の大君正忌日

五月廿五日 当大君誕辰

六月十四日 ミカド皇誕日

七月七日 此日ハ我国ニ而五節句と唱へ、三月三日、五月五日、

九月九日同様之大祝日

如此大祝日ニ而欠へからざる日ニ候間、此方の需ニ任せられ度候。

正月十六日 七月十三日 十四日 八月朔日 九月十日 十二月

廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日

但十二月晦日無之年ハ廿九日を以休日とす

右之休日ハ是また欠へからざる日ニハ候得とも、休日多く候ては各  
国商人等迷惑之趣其事情もまた無抛事ニ候間、此日ハ其方之需ニ  
応し第十一字より二字まで運上所を開置へし。

右之趣了承被致回答あらん事を欲す。謹言。

慶応元年

七月五日

東條八太郎（花押）

（他二名）

五節句、家康の忌日、將軍（家茂）の誕生日、天皇の誕生日を運上所の休日とし、小正月や八朔の日などは昼だけの営業にしたいということを伝えている。奉行所側は、これらの休日に指定した日を「我国の士民に於て欠くへからざる大祝日」と説明しているが、將軍の誕生日を庶民までが知っていたとは思えない。幕府も、庶民の統一的な祝祭を指示したことはなかった。<sup>(17)</sup>しかし、それまで殿中や宮中だけでの行事だった將軍、天皇の誕生日が、この時「休日」となるという大きな転換期を迎えるのである。運上所の休日について各国と協議する時、日本古来の行事がある日より、個人の記念日を休日とした方が欧米の文化に合い、理解を得易いと奉行所が考えたからではないだろうか。そこで、家康の忌日と將軍と天皇の誕生日が持ち出されたのである。

井上勝生氏によれば、明治新政府は天皇誕生日を天長節として、国民統合と、欧米諸国との協調に利用したという。<sup>(18)</sup>天皇の誕生日を「休日」にするという考え方が、国内の庶民にまで適用されたのである。幕府にしても新政府にしても、欧米列強と関わり近代化していくという中で、このような政策を取ることは必然だったのかもしれない。幕府が倒れたために、將軍の誕生日は「国民の休日」にならなかったのである。

これに対して、下級武士から庶民層の誕生日は、幕末、明治になってからも、その考え方は変わらなかったようだ。<sup>(19)</sup>人々の間で子供の誕生日を中心に、家族でささやかに祝うことが続けられ、明治、そして戦後の欧米文化の輸入、満年齢の法制化を経て、現在のような形になったのではないかと考えられる。<sup>(20)</sup>現在では西洋的な面の多い誕生日の行事であるが、生まれた日を記念するという概念は、近代以前の日本にも存在したのである。

## 註

- (1) 藤田寛「寛政期の朝廷と幕府」(『歴史学研究』五九九 一九八九年)
- (2) 『世界大百科事典』平凡社 一九八八年「誕生日」の項(小池文貞)
- (3) 『日本民俗大辞典』下巻 吉川弘文館 二〇〇〇年「誕生日」の項(中村彰)
- (4) 他に『日本社会民俗辞典』第二巻 日本民族(ママ)学協会編 一九五四年「誕生日と年取」「初誕生以外に年々の誕生日を祝い、贈答などをする風習は、古くは日本にはなかったようである。天長節の設定をはじめ、明治以後は誕生日も一般化したところがあるが、おそらくそれは欧米の風習の移入であり、今日もなお民間一般の慣習とはなっていない。これは日本人の年齢の数え方が、かぞえ年である」と相関している。つまり、日本では「年取祝」によって一年のはじめに全家族が一同そろって、あたらしく年を重ねる祝をするのが久しい風習となつてゐる。それ故、各個人の誕生日ごとに祝をし、あたらしく年を加えたことを承認しあう慣習は生ずるはずもなかったのである。(中略)昭和二十三年(一九四八)以来、日本でも満年による数え方が法制化されたが、われわれの感覚はまだそれに馴染めず、多くの混乱さえもたらしている。一見不合理とみられる数え年の風習も、それは複雑に他の事象と関連し合っている。単にそののみを取出して、他国の制度ととりかえても、それは新たな混乱を加えるにすぎないであろう」(竹内利美)
- (5) 『日本を知る事典』社会思想社 一九七一年「初誕生」「日本人は古くから自分の生まれた月日に毎年の誕生日をすることはなく、正月を迎えると一様に年齢を一歳ほど加えたのである。しかし、生児を迎える初めての誕生日だけは古くから祝われたようで、ムカワリ月・ムカイドキなどといって、生児の将来を占い祝福する幾つかの行事がある(後略)」(中村彰)など
- (6) 『日本民俗学講座2 社会伝承』朝倉書店 一九七六年 p.二六六「誕生と生児の社会的承認」「現在の日本の家庭では、誕生日になると御馳走をしたり、プレゼントをする風が顕著であるが、つい最近まではこのような風習はなく、初誕生くらいのものであった。というのも、歳は正月がくればとといったところから誕生日がなかったと考えられる(後略)」(河上雄一)、増田勝機「誕生日を祝う習俗並びに初誕生のエラビドリ習俗について」(『日本民俗学』(日本民俗学)一四四 一九八二年)、宮田登「冠婚葬祭」岩波新書 一九九九年 p.九「誕生日を毎年祝う風習は近代以後、欧米にならってきたものであった」など
- (7) 和田英松「誕生日の祝」(長坂金雄編『日本風俗史講座 四』雄山閣 一九二九年)という研究があり、古代から近代(明治)までの天皇や将軍の誕生日について概説されているが、これ以後全く顧みられていない。岩崎竹彦「近世史料にみる年々の誕生日について」(『紀州の歴史と風土』御坊出版会 一九九六年)では、民俗学的見地から下級武士や庶民の誕生日の事例が挙げられている。岩崎氏は、公家、武家の誕生日についても検討することを今後の課題としている。「これまでに誕生日は年取り祝いの延長として考えられてきたふしがある。その考えでは、正月に家族全員がいつせいに年を重ねる習慣を持つ前代日本社会において、個人の誕生日を祝う習慣が派生しなかったとするのは当然の結果といえよう。しかし少ない事例ではあるが、近世都市において常民性を有すると考えられる人々が年々の誕生日を祝う行っていたという事実も見逃せない」
- (8) 朝尾直弘「將軍権力」の創出(『歴史評論』二六六 一九七二年)
- (9) 朝尾「將軍権力の創出」(『歴史評論』二六六 一九七二年)
- (10) 和田前掲論文、沼田次郎「誕生日を祝うこと」(『日本歴史』四四八 一九八五年)
- (11) 『続日本紀』(『国史大系』吉川弘文館 一九八五年)宝龜十年十月己酉「是日当天長節。仍宴群臣賜録有差。又 詔贈外祖父從五位上紀朝臣諸人從一位」
- (12) 井上勝生「一八六八年の天皇誕生日の祝祭―近代成立期の国民統合について―」(『史林』七二・三 一九八九年)
- (13) 『お湯殿の上の日記』続群書類従 続群書類従完成会 一九九三年
- (14) 『武家名目抄第五(歳時部)』(『故実叢書』故実叢書編集部 一九九三年)
- (15) 『大日本史料』東京大学史料編纂所 第七編十八
- (16) 『大日本史料』応永廿六年二月十二日「義持、誕生日ノ祈禱ヲ行フ」
- (17) 『蕨軒日録』(『大日本古記録』岩波書店 一九五三年)
- (18) 文明十六年五月二日「晩大旦越准三宮(足利義政) 祈禱、新鋪席四枚改之」
- (19) 文明十六年六月二日「公方(足利義政) 誕生祈禱」
- (20) 文明十六年七月二日「公方誕生祈禱」
- (21) 文明十八年正月二日「大旦越准三宮正誕辰也」
- (22) 朝尾直弘「幕藩制と天皇」(『大系日本国家史』一〇 岩波書店 一九七五年)
- (23) 朝尾前掲論文「將軍権力」の創出、「幕藩制と天皇」
- (24) ユルン・ラメルス「織田信長の誕生日について」(『ヒストリア』一四〇 一九九三年)
- (25) 『耶蘇会の日本年報』第二輯(拓文堂 一九四四年)
- (26) 『鹿苑日録』(辻善之助編 太平洋社 一九三五年)
- (27) 『本光国師日記』続群書類従完成会 一九七〇年・七一年
- (28) 『鹿苑日録』慶長十一年四月七日条にも「今朝依□正御誕生般若也。般若以前有粥。喫齋各分散」とある。

(22) 『江戸幕府日記』(姫路酒井家本 藤井讓治監修 ゆまに書房 二〇〇三年) 寛永十四年七月十七日条

(23) 『徳川実紀』(『国史大系』吉川弘文館 一九七六年) 寛永十四年七月十七日条

(24) 高柳光寿・岡山泰四・齋木一馬編『寛政重修諸家譜』第四卷 続群書類完成会一九六四年 p.二一七

(25) 『江戸幕府日記』 寛永十五年七月十七日「一、御宮方還御有而今日御誕生日ニ付老中并殿中祇候之面々御祝之餅御酒可被下候間 上意之趣朽木民部少(種綱小姓)申渡之。御右筆部屋次之御座鋪ニて各給之」

(26) 『蔵有院殿御実紀』 万治三年八月三日「御誕辰御祝例のごとし」

(27) 『常憲院殿御実紀』 貞享元年正月九日「御誕辰の御祝例に同じ」

(28) 『柳宮日記』 享保五年十月廿一日「一、御誕生日ニ付如例年之御祝之餅熨斗被下之」

『有徳院殿御実紀』 享保十一年十月廿一日「御誕辰なれば、群臣に餅酒たまふこと例の如し」

(29) 『惇信院殿御実紀』 寛延三年十二月廿一日「御誕辰により餅酒賜ふ事例の如し」 宝暦十年にも忠恭は干鯛を献上している。

(30) 『柳宮日記』 五月廿二日「一、御誕生日ニ付為御祝儀以使者左之通献上之干鯛一箱 酒井雅楽頭(忠恭) 右於蘇鉄問阿部伊予守(正右奏者番) 家来請取之」

(31) 『統徳川実紀』(『国史大系』吉川弘文館 一九七六年)

(32) 『梅若実日記』 第一巻 梅若六郎監修 八木書店 二〇〇二年

『柳宮日記』 京都大学附属図書館マイクロフィルム史料

『府内藩記録』 京都大学総合博物館(特き7)

「文久元年辛酉年 御誕生日御祝儀有之節 当番相勤候留 水野肥前守留 松平左衛門尉(開扉不能) 五月廿五日

慶応二丙寅年 御誕生日御祝儀有之 中之間御祝儀申上候節之留 五月廿五日 松平左衛門尉

一、今日御誕生日御祝儀有之候ニ付、例刻<sup>○</sup>着<sup>○</sup>用<sup>○</sup>出<sup>○</sup>宅<sup>○</sup>切<sup>○</sup>ニ而西<sup>○</sup>丸<sup>○</sup>江登城部屋江罷出候。

一、同役衆左京殿肥前右京方出候。  
一、御用□<sup>○</sup>清<sup>○</sup>ニ而加役采女若狭殿中務方出候。  
一、酒井老衆登 城之節当番始一同中之間へ罷出、揃後芙蓉之間被罷出候、御順略之。  
一、□<sup>○</sup>之様子ニ付御張付を後ニ当番跡高順ニ着座罷在候。  
一、無程老衆奥方被出、松溜替席溜溜間江御列座。溜詰同格御謁夫方大廊下江御列座。津輕越中守御謁相済御立戻菊之間へ御越を見請、当番始一同中之間へ相越二側ニ着座。老衆雁之間御□際江御列座。高家詰衆御謁相済中之間江御列座。其節一同扇子取出し進ミ当番方御祝儀申上ます  
右申上出し下り、扇子差同所御席有之候ニ付直ニ羽目之間通披一同部屋江引。  
一、無程退出、帰宅九半時。  
中之間御祝儀申上候図 「(図3参照)」

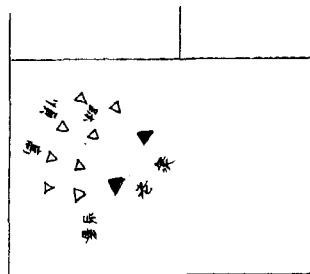


図3 『府内藩記録』  
(慶応二年五月廿五日)  
(筆者による転写)

(33) 『慶喜公御実紀』 慶応三年九月廿九日「一、十月二日。公方様御誕生日ニ付、御先招之通、御祝儀有之候。尤、御留守中之儀ニ付、御祝餅等ハ不被下候得共、御祝申上候儀ハ、前々之通相心得候様、向々江可被達候(傍線筆者)

(34) 『府内藩記録』 慶応二年の留↓註(32)

(35) 『有徳院殿御実紀』 享保十八年十月廿五日「御誕辰は此月廿一日といへど、証明院殿御事によりのべられしが、けふその御祝ありて、群臣に餅酒を下さる」

(36) 『慎徳院殿御実紀』 天保九年六月廿二日(五月十四日 家慶子死去)「御誕辰御祝ひにより、大老、

一、今日御誕生日御祝儀有之候ニ付、例刻<sup>○</sup>着<sup>○</sup>用<sup>○</sup>出<sup>○</sup>宅<sup>○</sup>切<sup>○</sup>ニ而西<sup>○</sup>丸<sup>○</sup>江登城部屋江罷出候。

宿老はじめ、布衣以上のものがら、両御所御附属まで席々にして餅、酒を下され、上直の拝謁已上のものがらおなじく賜物あり。また奥にして囃子あり。大老、宿老、少老見る事をゆるさる」

天保十一年六月九日(五月八日 家慶女死去)「御誕辰の御祝ひ延て此日にあり。大老、宿老はじめ、高家、詰衆、奏者番、留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上の諸職人、西城附属のものまで餅酒を下され、謁見以上々直のものがら同じく下さる」

(37) 寛政二年十月五日、誕生日当日に同三日に死去した家齊の女子の法会があったが、この時は後日祝儀が行われることはなかった。

(38) 『常憲院殿御実紀』天和元年正月九日「御誕辰にて群臣に餅酒を給ふ。実は昨日なれど、御忌辰によつてけふを用ひらる」

(39) 『有章院殿御実紀』正徳五年七月一日「此以後は本月の四日に御誕辰の御祝有べしと仰いださる」

(40) 『徳川諸家系譜』(続群書類従完成会 一九八〇年)「家祥公(家定)」

(41) 『柳宮日記』安政六年五月廿五日「一、御誕生日ニ付為御祝儀掃部頭老中始、高家詰衆御奏者番留守居諸番頭諸物頭布衣以上之御役人并に 御目見以上当番詰番在合之面々江於席々御祝之御餅御酒被下之」

(42) 『万覚書』東京大学史料編纂所 宗家史料マイクロフィルム

(43) 藤井讓治『徳川家光』吉川弘文館 一九九七年

(44) 二木謙一「江戸幕府正月参賀儀礼の成立」(林隆朗先生還暦記念会編『近世国家の支配構造』雄山閣出版 一九八六年)、同「江戸幕府嘉祥儀礼の成立」(『国学院大学大学院紀要文学研究科』二四輯 一九九二年)、同「江戸幕府將軍拜謁儀礼と大名の格式」(『日本歴史』六一八 一九九九年)、同「江戸幕府將軍拜謁儀礼と大名の席次」(『日本歴史』六四八 二〇〇二年)、同「徳川家康と幕府儀礼の制定」(『大日光』七二 二〇〇二年)

(45) 『柳宮日記』宝永五年四月廿五日条

(46) 『柳宮日記』享保九年十二月廿一日「若君様御誕生日ニ付於二九餅御酒被下之」

(47) 『柳宮日記』元文三年五月廿二日

「公方様(吉宗) 方  
竹千代様(家治) 江 御使 松平右京大夫(輝貞老中格)  
紗綾十卷  
二種一荷

大納言様(家重) 方  
竹千代様江 御使 松平能登守(乗賢家重付き)  
縮緬廿卷

二種一荷

公方様方

大納言様江

御看一種

御使 渋谷和泉守(良信吉宗付き)

右者 竹千代様御誕生日初而二付

御祝儀被進候

竹千代様方

公方様江

二種一荷

御使 松平能登守

右之通御祝儀上候

巻物五

竹千代様御使

松平能登守

右之通於奥被下候」

(48) 『有徳院殿御実紀』元文三年五月廿二日「竹千代君はじめての御誕辰により、松平右京大夫輝貞御使して、竹千代君に紗綾十卷、二種一荷。また 大納言殿に御側渋谷和泉守良信もて、看一種を進らせらる。大納言殿より松平能登守乗賢御使して、竹千代君に縮緬二十卷、二種一荷なり。竹千代君よりおなじ御使もて二種一荷 両御所に奉り給ふ。御使みな禄を給ふ。酒井雅楽頭忠恭、土岐丹後守頼稔、松平和泉守乗祐ならびに西城につかふまつる布衣以上見参ゆりし人々、みな御祝の餅をたまふ。明年よりは 大納言殿御誕辰のごとく御祝あるべしと仰出さる」

(49) 『湊明院殿御実紀』

宝暦十三年十月廿五日「若君(家基) はじめての御誕辰なればとて、布衣以上出仕して餅、酒を賜はり、それより下の群臣は、上宿の者ばかり賜はり、見え奉る事を得ざる者には、酒をたまはる。酒井雅楽頭忠恭、(酒井) 備前守忠仰もめして吸物、酒、餅を賜はる」

明和元年十月廿五日「若君御誕辰なれば、出仕の群臣に餅酒を給ふ。西城も当直の群臣に餅酒給ふ事同じ」

(50) 『文恭院殿御実紀』寛政六年五月十六日「若君はじめて誕辰御祝により、高家、詰衆、奏者番、本城西城布衣以上の士、又拝謁以上の宿直の面々、席々にして餅酒をたまふ。加納大和守久慎(嫡子家慶矢取役)同じくまうのほり餅酒を下さる。

同じ事を祝はせ給ひて、御所より若君の御方へ巻物二十、二種二千疋。若君御方より御所へ巻物二十、三種千疋。台の上へ巻物十、二種千疋。御使は松平伊豆守信明（老中）。戸田采女正氏教（老中）なり。また伊豆守信明へ、若君の御方より巻物。采女正氏教へ公より同じ品下さる。これ御使命ぜらるればなり」

(51) 『文恭院殿御実紀』

天保二年四月十五日（家定）「大納言殿御誕生御祝により、上直布衣以上、拝謁已上のともが席々にして餅酒を賜はる」

天保二年五月十五日（家慶）「この日西城にして御誕生の御祝として、上直布衣以上、拝謁已上のともが席々にして餅酒を下さる」

天保二年十月五日（家齊）「御誕生の御祝として、高家、詰衆、奏者番はじめ、拝謁以上のともが席々にして餅酒を賜ふ」

(52) 『慎徳院殿御実紀』

天保九年四月十五日「石大將様御誕生により、宿老、高家、詰衆、奏者番、留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上のともが席々にして御祝の餅酒を下さる。拝謁以上の宿直、諸番士おなじく餅酒を下さる」

(53) 『大猷院殿御実紀』

正保三年二月廿九日条

(54) 『惇信院殿御実紀』

延享三年十月廿一日（吉宗）「けふ 大御所御誕生なれば、西城にて上直の諸臣に餅酒を賜ふ」  
延享四年十月廿一日（吉宗）「けふ 大御所の御誕生により、西城にて群臣に餅酒をたまふ」

『慎徳院殿御実紀』

天保九年十月五日（家齊）「大御所誕生の御祝として、大老、宿老はじめ、上直の高家、詰衆、奏者番、留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上、拝謁以上のともが席々にして餅、酒を下さる。奥能あり。大老、宿老、少老、三御所ともに見る事をゆるさる」

(55) 『隆光僧正日記』

続群書類完成会 一九六九～七〇年

(56) 『隆光僧正日記』 元禄八年正月十三日「桂昌院様御誕生日故、毎年三之丸へ被為成、御祝儀御振舞有之也。」この時点で「毎年」とあることから、もともと前から桂昌院の誕生日祝儀があったと考えられる。

(57) 『柳宮日記』

例え、十月の亥の日に餅を下賜する亥猪の祝には、將軍は出御している。  
寛文八年十月九日「玄猪之次第后刻白書院 出御御長袴上段着御。今晚御祝餅三方載備 御前、同餅御右方江置之、諸大名衆出座頂戴之。 御刀大久保出羽守」（傍線筆者）

(58) 『大猷院殿御実紀』

寛永廿年七月十七日条

(59) 『江戸幕府日記』

正保二年七月十七日「一、今日 公方様 御降誕日於御座之

間御祝之餅酒亦上之故殿中祇候之面々御祝之餅酒被下之」

(60) 国文学研究資料館史料館編『幕府奏者番と情報管理』名著出版 二〇〇三年

大友一雄「江戸幕府と情報管理」臨泉書店 二〇〇三年

表紙は省略したが、以下の通りである。

(61) 『文政四辛巳年』

御誕生日御祝儀有之節  
当番相勤候留

十月五日 松平丹波守（光年） 備写  
板倉阿波守（勝職）

(62) 『御誕生日御祝儀頂戴之図』（「手留並席図」（深井雅海編『江戸時代武家行事儀礼図譜』六 東洋書林 二〇〇二年）同書の解題では、この手留の作成者を文化十年から文政十二年まで在職していた奏者番であると推定している。また、史料の配置が玄猪祝儀の図の次であることにより、十月生まれの家齊期のものであるとしてよいであろう。

(63) 『徳川実紀』を編纂する際に、「高家、詰衆、奏者番、留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上の諸職人」などの記述が「群臣」と書き換えられたものと考えられる。例えば、『柳宮日記』安永三年五月廿一日条に「高家詰衆御奏者番布衣以上之御役人并御番頭衆小役人」とあるのが、『天明院殿御実紀』の同日条では「群臣」となっている。

(64) 『大岡越前守忠相日記』

大岡家文書刊行会 一九七二年

(65) 『大岡越前守忠相日記』

寛保二年十月廿一日条に「去年」とあるので、寛保元年からの変更であると考えられる。  
「一、今日兩本願寺重陽之御内書御渡候付因幡守（青山忠朝奏者番）登城有之候、且又御誕生之御祝儀も頂戴、前々ハ大目付何之上駟斗目着替頂戴二候之處、去年越中守（牧野貞通 寺社奉行）被出候節、向後御用二而登城候ハ、伺二不及頂戴可仕之旨左近殿（松平乗邑 老中）中務殿（本多忠良 老中）被仰聞其通罷成候、当年も去年之通二而因幡守頂戴被致候」

(66) 『鈴木修理日記』

近世庶民生活史料未刊日記集成三六 三一書房 一九九七年  
「有徳院殿御実紀」元文三年六月二日「西城同朋頭石川欽阿弥某職をはがれ小普請に入らる。これ隸下の太鼓役石川玄領といへるもの、此月廿二日御誕生の御祝ひにたまわりし酒に過醉し、申刻の城鼓を三度までうちしにてなり（中略）玄領慶米を収公せらる」

(67) 『有徳院殿御実紀』

元文三年五月廿二日↓註(48)

(68) 深井雅海「図解・江戸城をよむ」（原書房 一九九七年）

(69) 『天明院殿御実紀』

宝暦十一年五月廿二日条に、「御誕生によりて、出仕の群臣

(70) 『天明院殿御実紀』

宝暦十一年五月廿二日条に、「御誕生によりて、出仕の群臣



に餅酒を賜ふ」とある。また、將軍、嗣子どちらの場合でも本丸・西丸両方に祝儀が配られることがあったのではない。時代が下がって『慎徳院殿御実紀』天保十一年六月九日条に、「御誕辰の御祝ひ延て此日にあり。大老、宿老はじめ、高家、詰衆、奏者番、留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上の諸職人、西城附属のものどもまで餅酒を下され、謁見以上々直のともがら同じく下さる」とある。

(71) いわゆる年祝と呼ばれる四十歳、五十歳などの祝は誕生日とは別の日に行うことが多い。例えば、十月二十一日生まれの家重の五十歳の祝いは、宝暦十年三月二十三日に行われている。(『徳川幕府家譜』) 綱吉も四十歳の祝いは貞享元年十一月九日に行っているが(同)、五十歳と還暦の祝いは例年誕生日を祝う日に合わせて行っている。

『隆光僧正日記』元禄八年正月九日(綱吉五十の賀)「例年も今日御誕生日の御祝儀有之、当年者御賀之御祝儀被遊、愚柄ハ鶴姫君様(綱吉女)ハ御賀之御祈禱山王へ御湯被進二付、御代參被仰付、明六つ半比罷越、九つ時罷歸時分、早々罷上候様ニ出羽守殿(柳沢保明(吉保)側用人)ハ御奉書到来、依之、途中ハ直ニ登城、上意ニ、今日御賀之御祝被遊、出家ハ加様之祝之座へハ不出事之様ニ世間申触、然共、其方儀ハ各別之儀故、被召也(後略)」

(72) 『俊明院殿御実紀』宝暦十三年十月廿五日条

(73) 『温恭院御実紀』安政元年四月十五日「一、御誕生日二付、為御祝儀老中始、高家、詰衆、御奏者番、御留守居、諸番頭、諸物頭、布衣以上御役人并御目見以上、当番、詰番、有合之面々江於席々御祝之御餅、御酒被下之」

(74) 小川恭一編『江戸幕藩大名家典』下 原書房 一九九二年

また、「御役中日記」(常陸国土浦土屋家文書)「国文学研究資料館史料館編」『幕府奏者番と情報管理』名著出版 二〇〇三年) 寛政十年十月九日、玄猪の祝儀に藤堂和泉守高疑や有馬中務大輔頼貴の名が見える。

(75) 『大猷院殿御実紀』正保三年八月三日「大納言殿御誕辰により群臣に餅酒をたまふ。紀水両卿、尾水三世子より一種づ、大納言殿へ紀邸より杉重一組。延命酒一樽。水邸より杉重一組。肴一籠。三世子より一種づ、奉らる」

(76) 山本博文『江戸お留守居役の日記』講談社学術文庫 二〇〇三年 p.二四七

(77) 藤井前掲書『徳川家光』

『徳川家光公伝』日光東照宮社務所編 一九六一年

(78) 『有徳院殿御実紀附録』「享保七年十二月廿六日 東照宮御誕辰の賀宴を開かれ、普第の人々に饗膳をたまはる。これも其はじめ直清(室鳩巢)に、もろこしの故事ども御尋ね有て、明太祖の生日を、歴世の子孫祭らる、こと、会典の中より書ぬきて奉りけるに、猶深き盛慮を加へ給ひ、終にこれを行はれしなり」

(79) 『有徳院殿御実紀』享保七年十二月廿六日条

(80) 『俊明院殿御実紀』

天明二年十二月廿六日「けふは 東照宮の御誕日にて、ことしは其甲子さへ廻同せしをもて、明日紅葉山 御宮に告祭の御使立らるべしと仰出さる。これ 有徳院の御ときにもこの慶会ありし例によられしとぞ聞えし」

同廿七日「紅葉山の 御宮に田沼主殿頭意次(老中)代参し、大納言殿よりは鳥居丹波守忠意(西丸老中)代参す。よりて溜詰拝謁して慶賀し奉り、饗膳をたまふ。宿老、御側、近習みな饗膳たまはる。諸第衆、雁の間詰、奏者番、菊間縁詰、布衣以上皆拝賀す。よて三家ならびに尾紀両世子のもとに久世大和守広明(老中)、水野出羽守忠友(老中)御使し、酒肴つかはされ宮内卿(清水)重好卿(家重子)には御側本郷伊勢守泰行(小姓)御使し、民部卿(一橋)治済卿(家齊父)には津田日向守信之(小姓)御使して、同じく酒肴つかはさる。かたぐよりまたもの奉り祝し奉らる。日門も献物あり」

『慎徳院殿御実紀』

天保十三年十二月廿六日「ことし支干 神祖御誕生日相当により、紅葉山 御宮に 両御所御詣あり。御祝の猿楽命ぜらる。番組は弓八幡、田村、草紙洗、石橋、融、留之舞。狂言麻布。唐相撲なり。御能初めは少老遠藤但馬守(胤統)つとむ。溜詰。普第の大名、おなじき嫡子、高家、詰衆、奏者番、菊間縁類詰、おなじき嫡子、布衣以上まうのぼり見る事をゆるされ、席々に料理を下さる」

(81) 例えば、大奥の女中たちは、猫の誕生日まで祝っていた。

永島今四郎・太田賢雄『千代田城大奥』(原書房 一九七一年)「女子の交際」  
いとほしたなくばからしきは猫児の贈り取りなり御年寄中年寄等の部屋にては必らず猫を飼ふが例にてその猫妊娠すれば出産前より予約して貰ひ受くる者多く貰ひ受けざるをは無礼に思いて好まぬながらも予約する向もあり扱てそのいよいよ乳を離れたるを待ちて贈るときは鯉節飯器チャンチャン二三枚鮮魚一籠及び局タモン等へ銘仙編一反を添ふ贈られたる方にては頓て誕生日ともなれば赤の飯を炊き料理を添へて女中を招く招かれし方にては手遊びものを取揃へ土産に持参するも事々しそののみならずその猫児牝なれば三月に難祭り雄なれば五月節句に人形を買ひ入れ派出にその日を祝ふなど馬鹿らしき限りといふべきのみ

猫の「誕生日」という概念があるのならば、当然人間の誕生日も祝うべきものとして認識されていたと考えるべきであろう。

(82) 『輝良公記』東京大学史料編纂所蔵

(83) 『京都町触集成』第六巻 京都町触研究会 一九八五年

(84) 『京都町触集成』

(85) 『輝良公記』

安永六年三月廿二日「益君生日二付 上御霊社江代参参左門也。新女院依御慎中祝延引也」

- 同四月廿二日「益君延引之誕生日祝有之凡如例云々」
- (86) 『輝良公記』 天明二年三月廿二日条
- (87) 『時慶卿記』 内閣文庫蔵(写真帳 京都大学古文書室)
- (88) 『時慶卿記』  
文禄二年十一月五日「誕生日ノ祝赤キ食、酒ヲ今朝申付候。暮テ風呂へ入。大膳職召ツレ候。侍従モ同心候。増水(ママ) 酒ヲ振廻テ返之」  
慶長十四年十一月五日「一、誕生日ノ祝餅酒ヲ家中へ少納言方へモ贈候。又茶口切ト田楽ニテ少納言衆呼及夜半候」
- (89) 『泰重卿記』 史料纂集 続群書類完成会 一九九三年
- (90) 『泰重卿記』 宮内庁書陵部蔵(写真帳 京都大学古文書室)
- (91) 『泰重卿記』  
元和二年正月八日「晩ニハ御霊御社参候、予誕生日故也」  
元和三年正月八日「予誕生日、於神前神事、飯後上御霊参社、御ハツヲ別當ニ被遣候」  
寛永三年正月八日「予誕生日」
- (92) 『勤慶日記』 京都大学総合博物館蔵(写真帳 京都大学古文書室)
- (93) 『勤慶日記』 元禄十三年十二月十八日「今日予誕生日也。雖然依服中不供神供祝着諸客一切停止之處、輒負御霊社神参上由(後略)この時は徳川光圀の死去に伴う鳴物停止令が出ていたが、経慶は遠慮しつつも祝宴を開いている」
- (94) 『勤慶日記』 宝永元年七月廿一日「侍従誕生日祝儀」  
宝永五年七月廿一日「侍従誕生日祝儀」
- (95) 『勤慶日記』 宝永元年十二月十八日「十八日甲申晴 予誕生日、殊年日甲申間別而心祝儀添気味早天以十兵衛令産神御霊社捧神楽從輒負以彦左衛門同道請供米祓送小鮒五十如例送。自中納言鯛一折送從中將小蛤并重看送。從中納言口切茶さき鴨両翼送。梅入来赤いも□たこ被送(後略)」
- (96) 『忠良公記』 東京大学史料編纂所蔵
- (97) 『忠良公記』 寛政九年三月廿一日「維那来余誕生日祈祷也」
- (98) 『近衛忠熙日記』 京都大学文学部図書蔵
- (99) 『瑛記』 安政五年二月廿八日「今日愚息誕生日ニ付上御霊社へ代参小性共御札受帰ル之事」
- (100) 『瑛記』 安政五年二月朔日条
- (101) 『日葡辞書』には「Tanjōichi (タンヂャウニチ) Vmauru f(i) (生まるる日) 出生の日」と記されている。
- (102) 『後水尾院當時年中行事 下』(水野忠央「丹鶴叢書 六 故実」臨川書店
- 一九七六年)
- (103) 『お湯殿の上の日記』 寛永二年六月四日(後水尾天皇正誕生日)「御たんしやう日にて、いつものことく五りやうきやうの大夫御なて物もちてまいらる。つねの御所にてへたくのかちん、御こふあわにて御さか月一こんまいる。女中御心きやう御よみあり。女院の御所へ御いはるへた／＼のかちん、御さかな、御たるまいる。ほうしゆゐん殿へも御いはるまいる。女中、ない／＼の御はんしゅうも御いはるあり」
- (104) 同八月四日「御たんしやう日の御心きやう女中御よみあり」
- (105) 藤井讓治氏翻刻
- (106) 『梅津政景日記』 大日本古記録 岩波書店 一九五三・六六年
- (107) 『秋田藩年中行事』 京都大学文学部図書蔵
- 「七月十七日 御代ニ依て違ふ  
一、御座之間上段 御着座 御着座 御着座 今日神鏡  
之餅御披有之  
東家 御家老  
右□ 御出座以前二目御敷居之内東方列  
居  
当番 御相手番  
右同断南方列居  
当番 同  
大御番頭 大小姓番頭  
無役回座詰番二人 八木  
右同断二目御敷居之外南方列居  
御髪斗鮑三方 御膳番献之  
腰高  
塩引 神鏡之餅上ニ少置之  
同  
酢和 染餅塗供饗 八木献之  
香之物  
御盆塗三方  
御酒錫陶 同  
右品々御膳台江載之菊地江御料理人手伝  
之御小姓詰処前江持出之夫より八木請取□  
献之御祝畢而引之

一、右畢て東家始詰番にて列居之面々江木具膳にて御祝儀之餅子被下之御酒一通之後引之

一、右畢て右餅子御枕江盛之広蓋江載之<sup>（附書二）</sup>

通御小姓持出二目御敷居之外より二覺目江並置之□時頂載（ママ）之面々左之通

諸奉行並同格

御留守居

御留守居

御留守居

御留守居

御留守居

御留守居

御留守居

右東方御敷斗立際江最前左詰罷在□々出席頂戴之

御側御用人

御膳番

御膳番

御膳番

御納戸役

当番大小姓筆頭一人

御側医

当番御小姓筆頭一人

御右筆々頭

当番大小姓

同御側小姓<sup>（奥御小）</sup>

同表御小姓

御右筆

御鷹役

当番御茶道組頭

同御茶道

奥付役

右面々表方者御右之方御勝手者御左之方江宅人宛出席

御目通にて被下之其外御台所役支配目付御用局物出御膳番物出御料理人組頭御茶

屋坊主御料理人御時斗坊主迄罷出頂戴之持退御次にて被下之

一、右畢而陰之間江被為入

一、右之外当番大御番組吟味役御政勢所物出大小姓物書写者御台所より神鏡之餅<sup>（附書）</sup>江載之御厨屋御法度書之間にて各頂戴

一、当番之御茶屋番同御掃除坊主迄於御茶屋被下之

一、当番之御茶屋番同御掃除坊主迄於御茶屋被下之

一、当番之御茶屋番同御掃除坊主迄於御茶屋被下之

(108) 『新井白石日記』（大日本古記録 岩波書店 一九五二―五三年）

宝永元年四月廿五日「今日ハ御誕節之由」

(109) 『南紀徳川史』堀内信編 清文堂出版 一九三〇―三三年

(110) 『池田光政日記』藤井駿他編 山陽図書出版株式会社 一九六七年

(111) 『鸚鵡籠中記』（名古屋叢書続編（九―十二））名古屋市教育委員会編・発行 一九六五、六、八、九年

(112) 『鸚鵡籠中記』

正徳三年十一月七日「あぐり誕生に付、弥四家内・文四を呼、暮より文四妻と久次来る。亥前各帰る」

享保元年十一月七日「快晴アグリ誕生に付、分四・弥四家内を呼。夕飯には玄端をも呼。かぞ都。亥比帰」

(113) 柴田純『江戸武士の日常生活』講談社選書メチエ 二〇〇〇年

(114) 『家乗』和歌山大学経済史文化史研究所 一九八四年

(115) 『家乗』延宝四年九月廿七日条

(116) 『家乗』延宝七年六月四日「庄次郎（生庵次男）誕節也。響八左衛門之妻」

(117) 親類の誕生日の記事もある。『家乗』延宝八年正月十四日「家室兄家有二三之介誕節之賀」

(118) 『桑名日記』沢下春男・沢下能親校訂 一九八四年

(119) 『柏崎日記』沢下春男・沢下能親校訂 一九八四年

(120) 『柏崎日記』天保十三年三月十九日「今日ハおろくの誕生日ゆへ、あかのまんに豆ふ汁が出来申候。両三日中二ハ、御下横目着可有と誠ニたのしみ致し居り候」

(121) 『柏崎日記』

(122) 『柏崎日記』弘化五年正月十九日「七ツ前ニ小僧つれて洗湯へ行。小僧誕生日。おきく命拾ひ日ニ付亦ま、焼き叔母さ御呼び申候。夜二入御隣の衆不残御出。茶ヲ入餅をやき四ツ過二引ケ申候」

(123) 『柏崎日記』

天保十一年十二月八日「今日ハ鑲兒の誕生日也。きのへ子也。小豆めし御神（マ）相備申候。夜ハ大豆いりて、御向の衆不残御呼ひ申候」

天保十三年十二月八日「夫より鑲之助誕生日ニ付、小豆めし出来、神さまへ上ル。御神酒も上げる。おゆきの智久治も少々酒給へ候ニ付、相手ニ成。四五盃給へル。鰯と大根の煮付豆ふの汁ト塩引也。大酔」

天保十四年十二月八日「今日ハ鑲之助誕生日ニ付、小豆めしおほる豆ふの葛煮出来る。御神酒ける。御向叔母さとお民品川のおろくと同年の女子、お八重都合三人呼ぶ」

弘化元年十二月八日「鑲之助誕生日旁小豆めし焼キ、御神酒上げ、酒の糟汁ニ鰯のに付てめしの時酒出し候。御隣より運公叔母さとお民御相伴。宇之助宗兵エメ五人の客也」

弘化二年十二月八日「鑲之助之誕生日ニ付、小豆めし出来神酒も備ル」

弘化三年十二月八日「鑲之助誕生日ニ付小豆めし豆婦いもの汁出来御神酒の残り給へ大酔いたし候」

弘化四年十二月八日「昨日の書残し。一昨日御祓御到来并鑲之助誕生日ニ付赤飯出来神酒上ケ御祓相納申候」

(124) 『門屋養安日記』近世庶民生活史料未刊日記集成一、二 三一書房 一九九七年

(125) 『門屋養安日記』安政三年正月八日条

(126) 『門屋養安日記』

嘉永二年十月十八日「一、門兵衛祝義、後振舞も不致候間、十九日は了介（泰安（養安養子）長男）誕生日ニ候間、其節、相招可申と存候処、門兵衛母精進の由にて、今日ニいたし申候。手廻斗祝事、相之山春松母、参申候」

嘉永四年十月二十四日「一、兵太（泰安次男）誕生日ニ付、廿日ニ祝義いたし候へ共、内祝ひいたし候」

嘉永五年十月二十四日「一、兵太誕生日ニ付、御膳上ケ、内夷講祝ひいたし候。」

万延元年三月十二日「一、お高（泰安次女）誕生日の祝義いたし候。使、作左衛門・門兵衛・辰五郎・惣八・松蔵・春松母参候」

慶応四年正月十四日「一、お国子（泰安三女）誕生日、御神酒相備候」

(127) 真下道子「出産・育児における近世」（『日本女性生活史三近世』東京大学出版会 一九九〇年）

(128) 『諸国風俗問答』（『日本庶民生活史料集成』九 三一書房 一九六九年）

(129) 『諸国風俗問答』（『日本庶民生活史料集成』九 三一書房 一九六九年）

(130) 勤修寺経慶は御霊社を「産神」と記している。

『勸慶日記』宝永元年十二月十八日「予誕生日、殊年日甲申間別而心祝儀添気味早天以十兵衛令産神御霊社捧神楽從輓負以彦左衛門同道請供米祓送小鮎五十如例送。（後略）」

(131) 『神道大辞典』平凡社 一九三九年

(132) 『古事類苑』神祇部十三 古事類苑刊行会 一九三二年

(133) 『大館常興記』に「天文九年（一五四〇）三月三日摂州門外まで来臨。明後日（五）公方様足利義晴 御正誕生日にて毎年御うふすな（五）御代官を被参候」とある。

（『武家名目抄第五（歳時部）』（『故実叢書』一九九三年）

(134)、『(135)』『有章院殿御実紀』正徳四年正月十五日「金地院崇達は僧録司命ぜられ、御誕辰の御祈禱つかまつるべき旨仰付らる」

『有徳院殿御実紀』享保二年六月十九日「金地院元雄惣録を命ぜられ、故事のままだに御誕辰の祈禱、月次の拜賀にも参るべしと仰下さる」

『本光国師日記』によれば、崇伝は僧録に任じられた直後に秀忠の毎月の誕生日の祈禱について、板倉勝重と話し合っている。將軍の誕生日の祈禱を行うのが、僧録の務めの一つであったのだらう。慶長十七年には秀忠の正誕生日の祈禱を行っているが、毎月のものでした新に始めようとしている。

元和五年九月廿三日「伊賀殿へ状遣す。案左ニ在之  
一書令啓候。内々得御意候。僧録にて毎月之御祈禱之事。来月ハ神無月にて候間。當月ハ相始申度候。御誕生日ハ七日にて御座候。當月ハ先吉日執行可申と存候。如何。御意次第第二候。御報ニ被示下候者可得其意候。御祈禱料之義ハ何まいにても。一年分一度ニ成共。又ハ月切ニ成共。可被成御渡候。是又尊意次第第二候。猶松首座可申上候。恐惶謹言。

九月廿三日 金地院——  
板伊州様人々御中——  
そして、家光期も毎月祈禱が行われている。  
寛永九年正月廿七日「板倉周防殿へ書状遣す。將軍様御祈禱之義申遣す。案在左（中略）  
次飛脚之便宜ニ書令啓達候。作廿六。一昨廿五。以書状申入候。定而相達可被得其意存候。然者。將軍様御誕生。七月十七日ニ而御座候間。毎月之御祈禱。十七日ニ被仰付可被下候。則南禅寺へも其段申遣候條。此書状被遣可被下候。猶追々可得御意候。恐惶謹言。以上  
国師  
正月廿七日 在判  
重宗様（後略）——  
寛永九年三月廿八日「（前略）又良長老。久右衛門一紙ニ追而状来ル。將軍様御誕生之御祈禱。三月十七日ニ執行候由申来ル」  
ただ、家宣の頃も祈禱が毎月行われたかどうかは不明である。  
『義演准后日記』（史料纂集 続群書類従完成会 一九八四、八五年）  
慶長七年八月三日「為秀頼卿御誕生日御祈、大般若転読衆如例」など、慶長五年

から九年までの記録が残っている。

- (137) 以心崇伝が折袴料について触れているように、(註(135)元和五年九月廿三日条) 毎月、あるいは毎年決まった日に行われる誕生日の折袴は、寺院にとつて安定した収入源だったのかもしれない。

- (138) 『輝良公記』と『勸慶日記』の誕生日には「螺貝餅」という餅が見られる。これは、転居の際に用いられる餅であるというが、誕生日祝儀との関係は分からない。

『輝良公記』

天明八年九月十七日「上御霊社江奉代参。下官依誕生日云々。嘉儀等如例令行之了。于有往来如例。宝林来給飯了。妻方遣はら貝もち一ふたにもの鱧焼物目。彼方も鱧二蛤にた五参る。自弘□如例献鱧蛤一折了。」

- (139) 『小梅日記』志賀裕春・村田静子校訂 平凡社 一九七五年

- (140) 『小梅日記』には、下級武士の家としては珍しく、当主やその妻(小梅)、成人した息子と、大人の誕生日も祝っているのが見える。

嘉永六年正月四日「今日雄輔(小梅長男 満二十歳) たん生日なれとも、赤飯たく計にてとなり杯まねかず」

嘉永六年九月廿三日「今日主人(梅所) たん生ゆへ、来年の事は不別、先祝はんと、浅之助に約し、とく字・柳窓よぶ約束のよしにて、浅之助より肴一籠送らる。大口ひ一、及び二、右料理して藤助をよびにやり、浅之助と兩人酒盛。跡にて梅本家内よぶ。母君は城ノ口の風呂へ入に行。お栄・塩路手つだふ」

万延二年正月四日「雄輔(満二十八歳) たん生。赤飯たく。宿にて祝ふのみ」

文久四年九月廿三日「今日主人たん生日に付、魚物求」

文久四年十一月廿三日「小梅たん生ゆへ赤飯祝ふ」

- (141) 『広辞苑』第五版

- (142) 井之口章次「厄年および年祝い」(井之口『日本の俗信』弘文堂 一九七五年)

- (143) 『柏崎日記』天保十一年十二月八日条↓註(123)

『桑名日記』天保十二年十二月八日「けふハ鏝之助たんじやう日じやであかのまんまができ、川うをとゆき大こんあらめのにつけとうふ二ゑびのにしめなり。セんとうへいつてきて御みき御とうミやうをあげる。たつたふたりでいたれば、鏝ねふけがきて、おじろさねせてくんなへといふゆへねせてやる。あすも御蔵で、いつしよ二よひからねられぬとくわんねんしてねせてくれと言也」

- (144) 小川了氏は、日本における誕生日の習慣は、西洋の風習がいつかの時点で日本人の生活にとりこまれたものであり、日本では誕生日がそれほど大きな意味を持たないと述べている。その理由として、時間に対する考え方が西洋と日本では異なり、西洋では時間は直進するものであつて個々人の一生という暦の基準点が誕生日であるのに対し、日本では時間は循環し、誕生をもつて暦が始まるものの、個人が円環的に進んでゆく時間軸上の節目節目を通過してゆくということを

挙げている。そして、正月に全員が年を取ったために誕生日は重視されなかったという。(『伝統的子供文化の再生』誕生日(井上忠司編『都市のフォークロア』ドメス出版 一九八八年)しかし、誕生日を年を取る日ではなく、毎年循環する節目の一つと考えれば、誕生日が日本的な考え方から疎外されるものでもないと言えるだろう。

- (145) 『長崎幕末史料大成』二 長崎文献社 一九七〇年

- (146) 省略部分」

(印) 東條八太郎

(印) 中台信太郎

(印) 吉岡良太夫

運上所懸(印)

(印) 御勘定方

(印) 御目付方

各国岡士

あすくわゐる江

奉行衆御小印」

東條八太郎以下の二名は長崎奉行支配吟味役である。

- (147) (148) 井上前掲論文↓註(11)

- (149) 『小梅日記』

明治九年正月四日「今日雄輔誕生日故、赤ま、たく」

明治十年正月四日「雄輔誕生日故、小豆飯たき、黒田お八重・楠え・三喜、内藤妻と姉弟、野口のお政、梅本健太郎、合八人よぶ。午前小梅かひ物に行。黒田隠居は腰痛にて不來。皆かへりて(以下空白)」

明治十年正月五日「私かたの姪誕生日、赤ま、あがりにお出被下と言」

明治十年二月十八日「内藤の子誕生日ゆへ、赤ま、によばれし由(後略)」

明治十年九月七日「旧八月朔日。美清(雄輔四女)誕生日ゆへ、赤ま、たく」

明治十三年六月廿二日「今日秀菅(雄輔三男)誕生日。赤ま、たき、黒田の両親をよぶ」

- (150) 映画監督・黒澤明が、戦時中に作品に対して行われた検閲について次のように述べている。

「サンバギタの花」の中に、フィリッピン人の娘の誕生日を、同じ職場の日本人が祝つてやるシーンがあったが、検閲官は、それを米英的だ、と云つて私を詰問した。

私は、誕生日を祝うのは、いけないのですか、と訊いてみた。

検閲官は、大体、誕生日を祝うなどという行為は米英的な習慣だ、今時、そんな場面を書くとは、もつてのほかだ、と云つた。

これは、検閲官のくせに、私の誘導質問にひっかかったのである。

この検閲官は、パースデイ・ケイキを問題にしていたのに、ついエスカレートして、誕生日祝いそのものを否定してしまったのである。

そこで私は、すかさず、云ってやった。

すると、天長節を祝うのもいけないのですか。天長節は、天皇の誕生日を祝う、日本の祝日ですが、あれも米英的な習慣で、もってのほかの行為なのでしょうか、と。」

（黒澤明『蝦蟇の油 自伝のようなもの』（岩波現代文庫 二〇〇一年））

明治末期から大正生まれと思しき検閲官が、誕生日を祝う行為は米英的な習慣だという口にしたという。それだけ日本での誕生日の祝い方が欧米化してきたということか、あるいは、誕生日を祝うことが一般的ではなく、検閲官自身も子供のころ祝ってもらったこともなかったということか。近代と現代の狭間において、当時の人々の誕生日に対する認識を、よく表している記録だと思う。

（読売新聞東京本社、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇七年三月三〇日受理、二〇〇七年九月二四日審査終了）

---

## **Birthdays in the Edo Period**

UZAWA Yumi

It has been thought that there was no custom of celebrating birthdays in Japan before the modern ages. The Japanese had aged by one all together at the New Year. Therefore, it has been thought the custom of celebrating birthdays was imported from Western countries after Japan became modern. There is little research on the birthdays. However, the birthdays of the Emperors and the Shoguns (generals) etc. were celebrated in Japan. The festive events on the birthday were held in the Nara period old.

To make the actualities in the Edo period clear, I examined how people celebrated the birthdays and the meaning of birthdays for them in this research.

In the celebration of Shogun's birthday, mochi (rice cake) and sake were distributed to the followers who came to Edo castle. Celebration of Shogun's birthday was regarded as etiquette to make the master and men relation firm.

The birthday was like a festival for the Court nobles. Nobles held their own birthday parties magnificently. The feast was held among the family and friends.

Emperors even celebrated the same day as the birthday every month.

The lower class samurai and the common people celebrated their children's and grandchildren's birthdays. They dedicated sekihan (rice steamed with red bean) to the gods and had a meal with the relatives and neighbors.

On the birthday, mochi and sake were served and red beans were eaten as the charm against evil. The faith in gods and Buddha took an important role in the event of the birthday. People were pleased at peaceful days and wished they will be healthy in the future.

People considered the day when themselves, the family and the friends were born a special day. There was a concept of celebrating the birthday that came round once a year. It was individual happy anniversary in the Edo period. There was a custom of doing some festive events on this day in all hierarchies.